
超野菜人、魔法世界に参る

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超野菜人、魔法世界に参る

【Nコード】

N2795T

【作者名】

天孤

【あらすじ】

ある朝のこと……男子高校生・青海^{おつみ} 流^{ながれ}は森の中にいた。なぜ森の中にいるのか、何のためにこんな所に自分はいっているのか、謎は深まるばかり。しょーじき言おう、面倒だ。クソオ！ 神よ！ 俺は何をした！ 呪ってやろうか、このヤロオー！ しかし流はシッポを携えて、物語に巻き込まれていく。そんなお話 ……。

第1話 オッス！ オラ、異世界人！（前書き）

ネギま×ドラゴンボールです。

といってもドラゴンボールは能力だけ。

主はネギまです。

第1話 オッス！ オラ、異世界人！

s i d e ? ? ?

拝啓 母上 父上

現在こちらの方では新緑の香りがすがすがしい季節になってきました。

そちらの方はいかがでしょうか？ そちらも爽やかな春風が吹いていることでしょう。

昨年からの高校生活も楽しく、部活や勉強の方にも力いっぱい頑張っています。

いますというより、いましたの方がしっくり来るでしょうか……。

なぜかと言うと、自分……迷子になりました。

これ、説明しようか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

とりあえず自分の名前と、その他のことを説明するのでしょうか。

まず俺の名前だが、性は青海^{おしみ}、名は流^{ながれ}。

少し水関係多くね？ みたいな感じもするが、そこんところは仕方ない。

元々住んでいたところが水の豊富な土地だったから、こういう名前が多かった。

まあそれは置いて、名前以外の説明しよう。

年齢は17歳。高校2年生で、部活は探検部に所属。

勉強はそこそこ、容姿は少しモテるぐらいの普通な高校生だ。

ちなみに探検部とは色々な場所を探検して、体力、知識をつけていこうぜ！ みたいな部活だ。

中学までは家から学校に行っていたが、高校からは県外の学校だったので家から学校まで距離があり、そのため学校にある寮に住んでいた。

そして昨日。

部活も終わり、バイトも終わらせた俺は、ご飯を食べて風呂に入った後すぐに寝てしまった。

そういえば漫画の新刊読んでなー、とか思いながらも眠りについた俺は、起きると森の中にいた。

あ…ありのまま、起こった事を話すぜ！

『寮でぐっすり寝ていたと思ってたら、朝起きてみると森で寝てた』

な…何を言ってるのか、わからねーと思うが、俺も何が起こったのかわからなかった…。

超能力者だとか宇宙人だとか未来人だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

閑話休題

少しの混乱もあつたが、時間を置くと落ち着いてきた。

まあ何が起こったのかは今更どうでもいい。

いまはこの森を抜けて、身の安全を確保しなければ……。

俺は早速行動と思い、地面に手をついて立ち上がるうと

…

もふ

もふ？ おかしいな、こんな毛深そうな部分は俺の体には無いんだが……。

俺は気になり、触った部分を見てみるとそこには細長い毛の棒みたいなものがあった。

はて？ なんだらうか、これは。獣のシツポだらうか……。猿系っぽいよね。

とりあえず俺は立ち上がり、そのシツポを拾おうとした。

しかし立ち上がるとシツポが消えていた。

あるえ？ 何故無い……。

俺は左右上下見渡す。

右……ない。

左……ない。

上……あるわけではない。

下……さっき見た。

何処にいった。

しかしシツポは無かったが、新たな発見があった。

体がちつちやい。これでは某高校生探偵と一緒ではないか。

つーか何故気付かなかった、おれ。流石に鈍感すぎるぞ。

しかもなぜか寝巻きではなく、俺は山吹色の胴着を着ていた。

正直この服は見覚えしかない。亀仙流の胴着だろう、絶対。

だって胸元に亀のマークあるし。じゃあ背中にもマークがあるの
だろうか？

そう思い背中を見ようと後ろを見ると、そこにはシツポがあった。

……。

……ふう。

あ…ありのまま、起こっ）ry

閑話休題

再度、混乱してしまっただが、こればかりは仕方ない。

シッポが生えていて驚かない奴はいない。だって寝て起きたらシッポが生えてんだぜ？

しかも体ちっちゃいし。多分7、8歳ぐらい。俺にどっしると…。

だってあの戦闘民族だぜ？ それになれたんなら修行するだろうが！

おれ……強くなったら『戦闘力……たつたの5か……ゴミめ……』
って言うんだ……。

別に死亡フラグでもなんでもないが、少し言ってみたい言葉だ。
とまあその前に何かをするにしても、まずどこかに自分の住む拠
点を探さないと。

あと食料の問題もあるし、この森に危険が無いとは言い切れない。
俺はとりあえず寝床を探すため、森の中を歩き出した……。

.....

.....

.....

.....

.....

そして2時間後。

俺は森の中にいい感じの湖を見つけ、続けてその近くに洞窟も見つけた、

食料である魚が獲れ、近くに寝床もある。こんな好条件の場所は他に無いだろう。

俺は洞窟に他の動物がいないかを確認めると、この洞窟を自分の寝床に決めた。

寝床を決めると、少し腹が減ってきた。これはサイヤ人としては死活問題だ。

俺はとりあえず魚を獲りに湖に行くことにした。

そして湖で魚を獲りにきた俺。

ここで問題が発生した。どうやって魚を獲るんだ……。

釣り？ 竿ありません……。

モリ？ モリもありません……。

素手？ そんな…熊じゃあるまいし。

どうしようか……そういえば、テレビでやってたんだけど、川で石と石をぶつけて魚を気絶させるみたいな感じの獲り方があったよ
うな……。

とりあえず湖に繋がる川のほうに行ってみようかな。

俺は川のほうに來ると、魚のいるところを探してみた。

川の中には大きな魚や小さな魚、けっこうな数の魚がいた。

俺は川沿いに落ちていた大きな目の石を探し出すと、それを川から突き出した石にぶつけてみた。

ガキンツと固いものがぶつかった音がすると、そこを泳いでいたであろう魚達がプカーッと浮かんできた。どうやら気絶しているよ
うで、そのまま流れていつている。

俺は魚が流れていく前に、慌てて大量の魚を川岸の平らな岩の上
に置いていく。

全部捕まえたところで、俺はこの魚を干物にすることにした。

いた。

現在は昼過ぎて2、3時頃だろうか。お腹が空いて、背中にくっ付いてしまう。

早く数匹だけひらきにせず、内臓を取った状態で残しておいた魚を焼いて食おう。

俺は干物用の魚を、適当に作った魚を乾かす為の道具に置くと、魚を焼こうとした。

しかし火が無い。ということで、あの原始的な火起こしをやってみることにした。

俺は木と木を擦り合わせる。しかしご都合主義だろうか、凄く簡単についた。

俺は火種を藁っぱい奴に付けると、そこに拾ってきた枯れ木を放りこんでいく。

すると火は大きくなっていき、十分魚が焼けるくらいには火が強くなった。

まあ塩が無いが食べれるだけマシだろう。

俺は木の枝を刺した魚を火の近くの地面に立てる。

新鮮で獲れたての魚は、時間が経つほどいい匂いが増してくる。

数十分ほど焼き、表面に焦げ目がついてきたので、それを手にとりパクリとかぶりついた。

うまい！ と言いたいところだが、さすがに味気が少ない。

何処かに岩塩とか落ちてないかな。普通、落ちてねえか……。

俺はその後焼いた魚を全部食べ終えると、一度洞窟の方に戻った。

戻ってきたわけだが、する事もない。
ということでは修行だ。修行というより、スペックの確認だな。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

この体になったということ、どの程度能力は上がったのか確認しなければならぬ。

まずは腕力。

俺は自分の身長 まあ130?ぐらいだろう ほどの岩を持ち上げてみることにした。

少し大きいと思うが、サイヤ人ならいけるはず!

俺は岩の下の方を持つと、思いっきり持ち上げてみる。

「ぐうぎうぎうぎういー!」

お、重い! 凄い重い! つーか重い!

正直重いつて思いすぎなんだろうが、普通に重いのでしょうかない。

そのまま力を入れ続け、少しぐらつと動いたところで岩から手を離した。

「はあはあはあ……」

はあはあ言ってるが、別に変態さんではない。疲れてるだけだ。正直言ってもうちよつと動くと思ってた。

まあいいか。少し動いただけでもいい方だろう。

次は木でも殴ってみようかな。俺は息を整えた後、木の前に立つとそのまま正拳突きをした。

ドシン！ と木が揺れ、鳥が羽ばたく。……まあまあかな？
普通正拳突きではこんなに揺れんだろうし。これは毎日やるう。

さて次だがジャンプ力とかどうだろう。

俺はナイフ（仮）を持って木の横に立つ。

俺は足を曲げ、思いつきり力を溜めるとそのままジャンプした。

ぴよんと跳び、頂点で一瞬止まったところで、木にナイフ（仮）で印をつける。

とんとと地面に降り立ち、印の場所を確認してみた。

目で確認した感じ、4〜5mぐらいだろうか。

人間としては驚異的だが、サイヤ人としてはどうなんだろうか。
悟空でも10mぐらいは普通に飛びそうだから、まだまだかな。

つぎは視力。これは遠くを見てみよう。

ということとで上下左右、色んなところを見てみた。

結果、およそだが40〜50メートル先の鳥の目をハッキリ見ることが出来た。

一瞬どこの民族かと思った。あの人たち凄く視力いいしね。

とこんな感じで調べていったが結果、全体的に人間としては驚異的な能力だが、サイヤ人としてはまだまだだってな感じだ。

まあスペックに関しては地道に修行すればいいし、悟空もあんだけ強くなれたのでどんどん修行していこうと思う。

俺はその日、精神的にも身体的にも疲れていたもので、そのまま寝ることにした。

明日からどうなるかわからんが、強くなれる事を願った。

続
く

第2話 修行すっか！

side流

あれから約5ヶ月。

最初は苦しかった生活も、徐々に問題点が改善され快適とはいわないが、ある程度の生活ができるようになった。

まず洞窟を変えていった。

周りを探索している時、見つけた大量の藁をベット代わりにしたり、少しゴツゴツした壁や床を、岩など固い物で削って平らにしたり、獣がきたとき用のためのトラップを張ったりと色々な事をやってきた。

食生活についても変わってきている。

最初は魚中心だったが、それに飽きてきた俺は肉を求め、獣を罠に嵌める為に落とし穴を作ったりトラップを作ったりと、最初こそ上手くはいかなかったが徐々に上達していき、最近では肉料理が多くなってきた。

余った肉は、うる覚えでの記憶をたどってやった燻製を試行錯誤でやっていき、なんとなく出来るようになってきた。

そしてあの日からやっていた修行は、なかなか大変だった。

修行するにしても何をすればわからないし、どういう風に鍛えればいいのかわからなかった。

ということで最初は筋トレやマラソンなど、基本的なことからやってみた。

少し亀仙流の修行を試みようかと思ったけど、あれは基本があつてからこそのもので、もう少し鍛えてからやってみることにしてみた。

筋トレといってもこの身はサイヤ人。

スペックを利用しての、自分を追い詰めるような修行を試してみた。例えば腕立てでは、背中に何十キロもありそうな岩を乗せてやってみたり、マラソンでは体に肉を巻きつけて、肉食獣に追いかけるなど色々やってみた。

成長しているかはわからんが、下がっているという事は無い。

最近では亀仙流の修行を取り入れて、背中に意外に近くにあった海で獲った亀の甲羅を、頑張って加工して甲羅を背負ってみたり、野菜食いでえ……ということ素手で畑耕そうぜ！ みたいな感じで畑を作ってみたり、湖で鮫はいないが思いっきり泳いでみたりと、

少しやり過ぎた感があったかもしれないが頑張ってきた。

畑仕事のせいで手は荒れ荒れだし、何回か蜂の巣をつついて避ける修行をやってみたが、最初はかなり刺されて顔が膨らんだ。

ここまでやってきたのだから、少し自分のスペックが気になった。ということでも少しスペックの再確認でもやってみようかなと思った。

まずは腕力。

俺は木の目の前に立つと、腕を腰に溜め、そのまま力強く正拳突き。

「どりゃあっ！」

ズドンツという音とともに、木は殴ったところから折れていった。折れたらいいなあとは思っていたが、まさか本当に折れるとは思わなかった。

折れた木は洞窟で何か利用させてもらおう。家具とか床とか…。

さて次にジャンプ力だが早速やってみよう。

俺は木の横までやってくると、思いつきり垂直に跳んでみる。

ぴよんというよりびゅん！ という感じでとんだ俺は約40〜50mは跳んでいた。

どんだけやねんという感じで、改めてやっぱ人間やめてるなと思った。

ちなみに亀の甲羅は脱いでいる。流石に着けたままだと重くて跳びにくい。

最後に視力だが、これは比べるにしてもあまり変わってないと思うので、変えて岩を持ち上げてみることにした。

俺は前と同じ岩の前に来ると、下の方を持って持ち上げてみる。

「よしよし」

随分軽く持ち上げてるなと思ってるかもしれんが、実際凄く軽く感じた。

もうちょっと苦戦するかと思ったけど、意外に普通に持ち上げられた。

なのでレベルアップして、20〜30mほどの大岩を持ち上げるのではなく、動かしてみようと思った。

皆もわかっていると思うが、悟空とクリリンがやっていた大岩動

かした。修行の最後にやっつてたやつ。

俺は洞窟の近くにある大岩のところまで来ると、岩に手を付け、思いつきり動かしてみた。

「ぐっ！！ くぎぎぎぎ……！！！！」

う、うごかね　！　重すぎるぞ、この大岩。
よくこんな大岩動かしたな、あいつら……。

ともかくこれが動かせるぐらい鍛えないとな。
そういえばサイヤ人って、シツポって弱点だよな。
これも鍛えないとやっぱ不味いか……。
というか本当に弱点なのか？　よし、一回握ってみよう。

「ふにゃん……」

こ、これはやべえ……！　すげえ力抜ける。
最初に鍛えた方がいいかもな、シツポ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

さて、スペックも確認したところで、修行でもしようか。

修行内容としては、筋トレとかも大事だが新たにやりたいことがある。

まずは“気”の認識と、その活用方法だ。

ドラゴンボールの世界では、“気”のような不思議パワーがあり、それはそれは戦闘に大分役立っていたように思える。

もしそれを自由自在に操れるようになれば、かなりの戦力アップを図れるのではないかと思っただけである。

ということやってみたいのだが、やはりここは座禅ではないだろうか。

ほら、悟飯だってビーデルに教えた時、座禅的なこととしてたし、ここは座禅でいくべきだろう。

それでは座禅をやってみようではないか。

10分経過

「……………」

30分経過

「……………」

60分経過

「……………」

……………はっ！ ね、ねねね寝てないぞっ！

ほ、ホントだからな！ くっ！ なんだその「なに言ってるの、コイツ？」みたいな目は！

バカにしゃがって、くそ！ いじけてやるっ！

閑話休題

……すこし取り乱してしまっただようだね、みんな。

ハハハ、ボクガソンナニアワテルワケナイジヤナイカ……。

まあいい……。とりあえず座禅はこのまま続けていく事にして、ちよつと修行してくるわ。

体がなまっても困るから、毎日続けないとね、じゃあ。

～流修行中～

さて、今日の修行も終わり、いまは修行ついでに狩ってきた肉を

焼いて食っている。

血抜きもやっているので、不味くはないがやはり塩が欲しい。

どうしたものか……やはり、どこか旅に出て塩のあるところまで行ってみるか。

とりあえず修行だな。強くならないと、獣に襲われた時とか困るし。

盗賊とかがいるとか、そこはわからないけど、ここが地球じゃないことぐらいはわかる。

だってなんか魚とか獣とか見たこと無い奴ばっかだし。この前とかでつかいトカゲみたいなのが空飛んでたし、まあトカゲというかドラゴンだと思うけど……。

あれはビビツたね。あんないるとか普通想像しねえよ……。

空を飛ぶで思い出したけど、舞空術めっちゃ覚えてえ……！

だって空飛べんだぜ？ 最高じゃん！ 人間の夢でしょ、空を飛ぶとか。

いつか覚えてやる。あとかめはめ波や気円斬とか操気弾も覚えた
い。

まあ頑張って修行しますか！

俺は心の中でそう思いながらも、藁に囲まれ眠りについた。

続く

第3話 旅立ち、そして
…

s i d e
流

「だらっしやあぁ！」

気合の声とともに、ビルのような大岩が動き出す。
あの時よりも鍛えぬかれた俺の体は、こんな大岩を動かせるよう
になるまでになった。

時は流れて1年半、現在俺の身長は140cmほどになり、筋肉が引き締まった体となっている。

力量としては、初めての天下一武道会の時の悟空より少し上、と
いったぐらいか。

まあ相性とかあるし、実際戦わないと結果なんてわかんねえしな
…。

「ふう……戻るか」

とりあえず今日は修行も全部終わってるし帰ることにする。

.....

.....

.....

.....

洞窟に帰ってきた俺は、夕食を食つと湖畔にある草原に寝転がる。

「ゲプッ……あゝ、腹いっぱいだ……」

最近、食料の需要に供給が追いつかなくなってきた。

やはりサイヤ人は燃費が悪いつて事だろう。

いままでこの辺りの動物などがいなくならないように気を付けてきたんだが、年をとるごとに一度の摂取量が半端なくなり、少しこの辺りに生息する動物が減ってきた。

このままではこの森の動物がいなくなってしまう。
なので旅に出ようかと、最近考え始めた。

正直ここをでてでも生活できるかわからないし、お金を稼げるかもわからない。

しかしこのままっていうのもダメなので、やはり旅に出るべきだろう。

もしこの世界 つつても予想でしかないんだが がファンタジー的な世界なら、ギルドなり傭兵なり、俺ができることなら幾らでもあるだろう。

どうせなら国に仕えて騎士つてのもいいかもな …ま、剣使えないんですけどね。

まあその辺はこの森を出て、外の世界を見てからにすることしよう。

しかし何時でようか……1カ月…1週間……いや、明日ぐらいに出るか。

べつに荷物も多くないし、迷うといつまでも出ないような気がするからな…。

「よし！ とりあえず寝るか！」

俺は起き上がり、湖畔から寝床へと移動すると、藁の上に寝転がった。

.....ちゅん。
ちゅん、ちゅん、ちゅんキュールルルルル...

朝になり、爽やかな日差しとともに小鳥たちの鳴き声が聞こえて

くる。

しかし俺の腹の音によって遮った所為か、小鳥たちがこちらを白い目で見てくる。

なんて人間味のある小鳥達だろうか。よし、ムカツクので焼いてやろう。

俺が小鳥達の方に向かうとすると、小鳥たちはこちらにむかって糞を落としてきた。

かなりの数が降り注いできて、全て避けきろうとしたが一つ避けきれず、俺の頭に糞があたった。

アホ、アホ、アホ……

やかましいっ！ アホ言っなっ！

ボケ〜、クソ〜、ナス〜

うぜえ！ つーか、なんでそんな喋ってんだよ。

テメエ、なんて鳥だこの野郎、焼き殺すぞゴオラアア！

俺がそういうと鳥たちはどこかに羽ばたいていった。

まったく失礼な鳥達だ。

俺は頭に付いた糞を湖でバシャバシャ洗い流すと、早速朝食を作る。

といつても肉焼いて、魚焼いて、それで食うだけだ。

まあ野菜もあるが、あんまり腹の足しにはならない。

俺はパツパと朝飯を済ませると、旅の準備を始める。

昨日は暗かったからあんまり準備をしなかった。

俺は黒曜石ナイフ、今まで取ってあった獣の皮、牙、食料を持つと洞窟から出る。

さすがに皮とか牙は随分と多いが、別に重いということはない。ただかさばる。

それらは蔦で縛ったり、葉っぱに包んだりと運びやすくした。

食料もけっこう多いが、サイヤ人の俺としてはもっと欲しいところだ。

まあ食料は旅をしながら狩りをすればいいので、別段困ることも

ないだろう。

「よし、行くか……」

たぶんこの洞窟に帰ってくる事もないと思う。

1年ちよつとしかいなかったが、住めば愛着も湧くし、別れも惜しくなる。

だが俺はポジティブなので、いつか忘れるだろう。ただの洞窟だしね。

「とつこととで出発進行　　っ！」

俺はこの樹海のような森を抜けるため、森にある川沿いを沿って歩き出した。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

旅を続けて1週間。

俺は何キロか先に、大きな街があるのが見えた。

俺の周りは丈の低い草原ばかりで、周りを見渡せやすく、街の発見も早かった。

この一週間の間、幾つかの村、町ぐらい見つけられると思っていたのだが、森が予想以上に人里から離れていた所為か、一つも見つけることが出来なかった。

そして今日、やっとの思いで見つけたのが、先ほど見つけたという街である。

ここから見た感じ、街は大きいほうだと思うので、流通がある賑やかな街なんだろう。

つーか早く料理を食べたい、ベッドで寝たい、俺以外の人見たい人というか、正直ファンタジーなのだとしたら、人がいるのかも怪しい。

まあそんな事はどうでもいい。

俺はちゃんとした料理を食べるため、遠くに見える街目指して走り出した。

そして街中。

さきほど入り口で軽く持ち物検査をされ、問題なしと判断された俺は、街中を歩いていった。

周りには狼男や妖精、猫耳美女など人以外の生き物がたくさんいた。

傭兵みたいな格好をした奴や、騎士みたいな奴がいることから、やはりここはファンタジーな世界なのだろう。

厨二な俺としては、むしろカモンな状況なので、正直、最高の気分だな感じた。

俺の周りでは果物や肉などを売るおばちゃんがいいたり、酒を煽る荒くれ者がいたりと、大分騒がしい。

遠くのほうには、形は違いがコロッセオみたいな闘技場らしきものがある。

街の入り口にいる守衛が、闘技場での賭けがこの街の特徴とか何とか言ってたから、多分アレが闘技場に違いない。

そついえばこの街の名前って何なんだろうか？

守衛のおっちゃんに聞いとけばよかった…。

俺はそう思いながらも、背中に背負っている荷物を売りに行くことにした。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

毛皮などを売って、懐が十分に潤った俺は、宿屋を探すことにした。

とりあえずこの街を拠点に、生活を整えていこうと思ったからだ。この年齢でも、この西洋並みの時代なら、働いていても余り珍しくはないだろう。

格闘などをするなら傭兵とかもいいかもしれない。

それに戦う技術を上げるなら、闘技場で戦うのもいいかもしれない。

闘技場で勝っていけば、金も貰えて傭兵としての名前も売れるかもしれないしな。

その後、宿屋を探して、何年ぶりのちゃんとした料理を食べ感動した後、適当に体を拭くと、少し固いベットに入って眠りについた。

そして次の日。

俺は朝食を食べた後、昨日から気になっていた闘技場に来ていた。闘技場にはもの凄い数の観客がいて、まるで人がゴミのようだった。と言いたくなるほどだった。

今日はとりあえず視察というか見るだけにして、いけそうだったら明日から出てみようかと思う。

俺は空いている観客席を探し出すと、戦いが始まるまで待つことにした。

それから数分後、俺が空を見て暇を潰していると、アナウンサーの大きな声が響き渡った。

『さあ、今期も開催されました、グラニクス夏季大会ミネルウア杯！ 第一試合西方は地元一の拳闘士団「グラニクス・フォルテス」の中堅自由拳闘士バリス・ファラウン！！！！』

へえ〜…拳闘士団とかあるのか……まあ所謂ギルドみたいなものか。

俺も強くなったら作ってみようかな、拳闘士団。

『対する東方はここ最近頭角を現し始めた、奴隷拳闘士

…』

そこでアナウンサーはそこで一息溜めると、大声で叫んだ。

『 … ジャアアアツク・ラカアアアアンツ!!! 』

……。

……。

……な、なんだって

ッ！！！

続く

第4話 拳闘士

s i d e
流

『 …… ジャアアアツク・ラカアアアアアンツ!!!! 』

…… な、なにiiiiiiiiッ!!

な、なんでこんな所にジャック・ラカンがいるんだ!?

ありえん……もしかしたらサイヤ人っぽいし、ドラゴンボールの世界かなあ……とかは思ってたけど、流石にネギまの世界とは思ってなかった。

といつてもこの街を見た瞬間、あっ、ドラゴンボールの世界ではねえな、と少し落ち込んだけど、まさかこんな結末が待っているとは……。

いや、しかし名前が一緒なだけの他人なのかもしれん。

とりあえず出てきた『ジャック・ラカン』とやらを詳しく見てみよう。

……。

……。

……ふう。

…はい、本物オオオツ!!!

俺はネギまの本を持っていたので、原作は知っている。

そりゃあ流石にこんな時間に時間が経てば、細かいところは忘れてるし、抜けているところもあるかもしれない。

しかし、しかしだ。さすがにジャック・ラカンの姿ぐらいは覚えてる。

見た感じまだ子供だが、褐色の肌に長めの金髪、特徴的な髪型を

見れば、なんとなく面影を感じる。

けっこう鍛えているようなので、マッチョなものもジャック・ラカ
ンっぱさを感じさせる。

しかし、まだまだ成長途中なのだろう。

一つ一つの動きに荒々しさがあるし、動きに無駄がありすぎる。

といっても強さ的には、俺と同じくらいかどちらかが少し強いぐ
らいだろう。

まあ考察は後でもできる。とりあえずこの試合を見届けることに
しよう。

……。

……あっ！

……そこは、それじゃないだろ！

………っおー！

………あっ…吹っ飛ばされた……。

ということでラカンは最後に相手を吹っ飛ばして見事勝利。
しかし勝ちはしたが、ラカンも死にかけるほどの重傷。
即座に闘技場の治療術士のもとに運ばれていった。

「ふうん……」

にしてもなかなか面白そうだ。

これはいつてみるか……。

俺は観客席から立ち上がると、その場を離れた。

.....

.....

.....

そして次の日。

俺は闘技場の参加者控え室にいた。

昨日見た感じ面白そうだったからな、戦うのも。

まあ人型あいてに戦ったことないから、勝てるかわかんないけど。だつて今までずっと獣相手だつたし。熊とか狼とか。

まあ正確には熊みたいなの奴や狼みたいなの奴だつただけだね。

ここが異世界の所為かわかんないけど、地球にいるような生物ではなかつたし。

「自由拳闘士のナガレ・オウミさ〜ん。直ぐに西方、入り口にきてくださ〜い！」

おっと、そろそろ出番のようだ。

ちなみに名前はこちら風に登録した。名前が先で、苗字があとになってる。

まっ、とりあえず行ってくるわ。

俺は控え室から出ると、闘技場西方入り口へと急いだ。

『さあ今日もやってきました、グラニクス夏季大会ミネルウア杯！二日目の第一試合西方は今日が初めての闘技場入りという新米自由拳闘士ナガレ・オウミ！』

俺はそのアナウンサーの声とともに、西方入り口より闘技場中心部に向かっていく。

『対する東方は地元一の拳闘士団「グラニクス・フォルテス」の中堅自由拳闘士ミハイル・キリシトン！』

…ウオオオオオオオオオオオオ!!!

相手も響き渡る観客の声とともに、こちらへと向かって来る。

見た感じムキムキマツチヨのお兄さんという感じのなりで、なかなか強そうだ。

「よおボウズ……ここは遊び場じゃね んだぜ？」

まったくもってテンプレな言葉である。

「おっさん、見た目で判断すると、痛い目見るぜ？」

「ああ？ なんだと？ つ か俺はまだ25だ」

俺は挑発するように言った。

おっさんは俺の言葉に少し苛立つ。

「まあ負けていいなら、そのままでもいいよ？ どうせ俺が勝つし」

「ほざけ、クソ餓鬼い！」

『ルールは皆様ご存知のとおり！！ ギブアップ戦闘不能で決着
！！ 武器・魔法に使用制限なし！！』

俺と相手はその声とともに、互いに後ろに下がり構える。

『 …… 開始!!! 』

ガァン!!

開始の合図とともに、俺と相手の拳がぶつかり合う。
俺はそのまま離れず、拳のラッシュを加えていく。
敵も俺の拳に拳を当てて、こちらの攻撃を相殺していく。
数十発にも及ぶ攻撃を繰り返すと、互いに一度離れた。

「やるじゃねえか、ボウズ……威勢のよさどおり、実力も伴って
いるらしいな」

「おっさんもな」

どうやら俺の実力はおっさんの目に適ったらしい。

「行くぜツ!!」

「こいや、おっさん!!」

声とともに互いに、隙を見せず攻撃を加えていく。実力五分五分。隙を見せた方が負けることになる。

「ふんッ!!」

「はあ!!」

ズン、ズズン、バガアン、ズドオン!!

互いに致命傷は与えれないが、体中に生傷が増えていく。研ぎ澄まされた拳は時に、その辺のなまくら剣より鋭利になる。時間が過ぎるほど、生傷が増えていくことに焦るが、ここは冷静に対処しなければいけない。

ここは一度下がるべき。

そう考えた俺は気功波を相手の顔へと放った。

まだまだ威力は弱い、大きめの岩を砕くほどの威力ぐらいはある。

「うおお!？」

当たりはしなかったが、相手に隙が出来た。
俺はその間に後ろへ下がると、注意しながらも構えを解いた。

「ふう……まさか“気”をいきなり放つとは……俺も流石に驚いた」

「それぐらいで驚いてたら、次のは危ないかもな」

「ほお……それじゃあその十二かを見せてもらおうか!！」

相手はそういつと目にも止まらぬスピードでこちらへと突っ込んでくる。

あと数歩と言ったところで、俺は両手を開いて額の前へと構える。

「……“太陽拳”!！」

パアアアア！！

技の発動とともに、辺りは光に包まれ、俺の姿を直視した相手は一時目が見えなくなる。

「目があ、目があああッ！！！」

まさかあの名言をここで聞けるとは……貴方の本名、ムカでは？
冗談はさておき、俺は瞬時に近づくと相手の腹に右ストレートを叩き込む。

「ぐふう！」

吹っ飛んだ相手は闘技場にある結界の壁へと叩きつけられる。
しかし俺の手は休まない。そのまま近づくと相手の体に拳のラッシュを叩き込んでいく。

「ぶふう！？ ばぎゃ！？ じゅぎゃ！？ ぴぎょ！？」

拳が当たるたびに奇声上がるが、ここで手を休めると勝つことが出来ない。

俺は一旦下がると、俺のとおきを発動させる。

「これで終わりだ!! ……かゝ、めゝ、はゝ、めゝ ……」

相手は慌ててその場から離脱しようとするが、体中を殴打され上手く動かすことが出来ない。

その間に俺の構えた両手には、体中の気が集まってパチパチと発光している。

「 ……波あ ……!!!!!!!!!!」

両手を突き出し、集めた気が解き放たれる。

その気は一瞬で相手の体にぶち当たって、そのまま相手を壁に叩きつけた。

「 ……かはッ ……!?! 」

相手はそのまま崩れ落ちると、闘技場の地面へと倒れこんだ。

試合後、いくつかの拳闘士団の勧誘があったが、全て断らせてもらった。

いつか旅に出るし、そこまで拳闘士団に魅力を感じなかった。拳闘士団の人たちはすこし残念がっていたが、また入ることになつたら言ってくれといって、去っていった。……まあそう言われても、入る事はないだろう。

いまはお腹を一杯にするため闘技場にあるカフェで、大量の料理を食べていた。

すでにテーブルには、いくつかのお皿の山がある。

やはり勝負後はお腹が減ってしまう。もっとお金を溜めないと、食費がなくなる。

俺が料理を食べていると、向かい側に誰かが座った。

ふと料理から視線を移すと、そこには褐色金髪少年が……。

「ぶっ!!」

「うおッ!? 汚ねえ!!」

「ごほごほと咳き込みながらも、相手を見ている。

昨日の試合のせいか、体のあらゆる所に包帯を巻いている。

といつても治癒術士のおかげか、たいした傷でもないようだ。

「いきなり噴出すとは、失礼なやつだな」

「うっせえ……」

そりゃあいきなり原作メンバーが目の前にくりゃあ、驚くだろうよ。

「……で、何の用だ？」

「いや、特に用事はねえ」

「ねえのかよっ!!」

おっと、思わず突っ込んでしまった…。

「別に用事がないと会っちゃいけねえことなんてねえだろ？」

「少しぐらいはなんか思惑があるだろ……」

「まあ、なんだ、ただ気になっただけさ。中堅に勝った新米のことがなあ」

「ただ運がよかつただけだ。つぎ戦えば負けるかも知れんな」

「謙遜するなよ。運も実力のうちって言うしな！」

まあそうとも言うが、太陽拳なんかつぎ戦えば、なにかしら対策がたてられるだろうな。

「まあいい。このまま闘技場で戦えばいつか俺と当たるだろう。その時は俺が勝たせてもらう」

「そうだな、いつか当たるかもしれんが、負けるつもりはない」

「いつとやって勝てるかわからんが、やってみるのは面白そうだ。」

「そういえばお前ナガレって言うんだよな？」

「ああ、そうだが。それがどうかしたか？」

「名前で呼んでいいか？俺もジャックがラカンで呼んでくれ」

「いいぞ。俺もラカンと呼ばせてもらう」

俺とラカンは右手を出して、握手した……………全力で。

「よ、よろしくなあ、ナガレ……………！」

「お、おつ、よろしくラカン……………！」

「おおおおお負けねエ……………！とか叫びながら握手をしつつけた俺たちが、カフェのおばちゃんに殴られたのは、言つまでもない。

あの野郎……………つぎ会ったらぶつ飛ばすッ……………！」

続
く

第5話 そっだ、ヘラスに行こう！

side流

ラカンと戦ったり、他の拳闘士たちと戦いながら過ごして、はや6年。

体はすでに13、14歳ぐらいには成長していると思われる。

ここ2年は闘技場で戦い続け、最近では拳闘士の中でも上位に入るほどの腕前になってきた。

強さ的には、ラディッツ対戦時の悟空より少し弱いぐらいだと思う。まあ予想なんだけど…。

4年ぐらい前からは、舞空術や気円斬など覚えるため鍛錬を続けてきた。

結果、舞空術はかなり出来るようになった。どうやら俺は気のコントロールが得意らしい。

気円斬のほうも、気のコントロールが出来ていれば使える技なので、舞空術よりかは時間はかかったが、なかなかいい感じに出来ている。

界王拳や元気玉も少しずつ練習しているが、やはり体得が難しく、なかなか使用することが出来ない。

界王拳は発動する兆しがないし、元気玉はまだまだ気の集まりが悪い。

やり方は間違っていないと思うのだが、やはりそれほど難しい技ということなんだろう。

他にもいろいろ覚えている技もあるが、その辺はまだまだ威力も弱いし、扱いきれてないから、後々使う機会があれば紹介していこうと思う。

閑話休題

まあ話を戻すことにしよう。

今日は闘技場での戦いも休みだったので、宿屋で暇を持て余していた。

まあ最近戦いが続いていたので、今日は宿屋で寝るところかなあと思ってたやさき、俺の部屋の扉をコンコンとノックする音が聞こえた。

はい、と返事をしながらも扉を開けてみると、そこにはマッチョな金髪野郎がいやがった。

「よお！ ナガ」 ……」

ガチャ

俺は扉を閉めると、椅子に座って読書をすることにした。

ふう……にしても今日は暇だなあ……。

ちなみにこの本の題名は『猿でもわかる格闘技』

税込み1250ドラクマで、全国の書店にて絶賛発売中である。

「 …… って何閉めてんだよッ！」

Bannon！ と扉を破壊してしまいそうなほどの勢いで開けて入っ

てきたのは、ラカン（バカ）だった。

「それで、何の用だ？」

「スルーかよ……まあいい。要件は一つ、俺は旅に出る、以上」

「ふん、達者でな」

「あれ、めっちゃ軽い……」

「お前の扱いはそんなもんだ」

「つか、いつか旅に出るとか前に言ってたし。ちなみにラカンはすでに奴隷拳闘士から普通の拳闘士になっている。」

「奴隷から一般市民になったということだ。」

「原作ではもっと時間がかかってた気がするが、どうでもいいので気にしない。」

「まあいい。俺は行くが、お前はどうすんだ？」

「……そうだな。お前が旅に出るなら、俺もそろそろ旅を再開し

ようかな」

「そうか、じゃあどこかで会うかもな」

「そうかもな。まあ死なない程度にがんばれや」

「ハッ！ 俺が死ぬと思うか？」

「世界が消滅したとしても、死なねえと思うな」

「くくく、ちげえねえ」

まだまだラカンは原作と比べれば弱いけど、それでもその辺の奴らに負けるとは思わん。

俺との勝負はほとんど実力が拮抗してるから、引き分けばかりだけ。

「いつでるんだ？」

「明日、明後日のあいだにはこの街を出る予定だ」

「そうか。俺も早めに出るとしよう」

その後、話すこと話したラカンは部屋を出て、部屋には俺一人が残った。

まあ元々俺とラカンしかいなかったんで、ラカンがいなくなれば一人になるのは当然だが。

そんな事はどうでもいいとして、旅に出るなら準備をしないと。俺はお金を持つと、食料や日用品、その他の物を買いに部屋を出た。

.....

.....

.....

「おっちゃん、それとそれ、それからそのやつもくれ」

「おっじゃ、全部で2400ドラクマだよっ!!--」

「はい、2400ドラクマ」

「毎度!」

いや、毎度っていうほど、この店来たことないんだけど.....。
俺は獣人族のおっさんにお金を渡して商品を貰うと、その場を離れ、荷物片手に歩き出した。

さっきので買う物は全部買った。調味料や簡易式のテント、その他にも旅に必要な物を買った。

最初、食料を買ったところと思ったが、旅の途中でなんか狩っていいかなと思って、買うのは止めた。

というか超大食漢である俺が食料を買った、物凄い量の荷物になってしまうので買う気がうせた。

とりあえず荷物を宿屋に置きに行くか。

俺は現在、邪魔な荷物を置きに行くため、宿屋に向けて歩を進めている。

あともう直ぐで宿屋につくと言うところで、裏路地の方から女の子の音が聞こえた。

壁沿いに移動して、物陰から確認してみると、ロープを纏った女の子と男が二人いた。

「なんじゃおぬしらは！」

「おいおい、なんでヘラス族のお姫さまがいるんだ？」

「なんでもいいじゃろ！ はなさぬか！」

「ぐへへ、ロリロリな女の子じゃないかあ〜！」

「ヒイ！？ こ、こやつ、気持ち悪いのじゃあ………！」

あつ、そんな悲鳴でるんだ……初めて聞いたよ。

俺の拳によつて顔面強打された男は、そのまま後ろに吹っ飛んでいくと建物の壁にぶち当たった。

そのまま動き出す様子も見られないので、たぶん気絶したんだろう。死んだわけではないのであしからず。

「誰だテメエ!!」

「そんなもん、なんでもいいだろ？ 問題はお前達が何をしてるかだ」

「ああ？ ……つて、お前は拳闘士のナガレ・オウミじゃねえかッ!?!」

俺の名前、知ってるじゃねえか……顔、確認してから尋ねろや。

「それで？ 逃げんのか、それともここで俺に潰されるか………」
「つに一つだ」

「舐めてんのか、テメエ！」

「10秒の間に答えろ。10 ……9 ……」

「な、なに！？　じゃあ、にg　…」

「…8、7、6、5、4、3、2、1、0ッ！！　はい、時間切れ　！！」

「おええ！？　せこすg　…」

「ちなみに反論は聞かないので、あしからず。それじゃ刑の執行だ」

「ギヤ　　ッ！！！！！！」

俺は宣言とともに、変態どもをこれから瀕死程度にするため、刑の執行を始めた。

ちなみに完全な余談だが、次の日、街にある裏路地にて二人の男性が裸で転がっていたらしい。

体中に殴打された痕があり、男達は顔を苦悩の表情にかたどられていて、随分うなされていたらしい。

に見つかるから、誰かが病院に連れて行ってくれるだろ。その後のことは知ったこっちゃない。

「そういえば嬢ちゃんは、姫さまだつてな。ヘラス族と言つと、たしかヘラス帝国か」

「そうじゃが、それがどうかしたかの？」

テオドラはきよとんとした顔で、頭をコテツと傾ける。

おふ……………まさかの精神攻撃、流は5000の萌えダメ ジを喰らった。

「いや、たいした事じゃないが、一国の姫さまがなんでこんなトコにいるんだ？」

「暇だったからのお。抜け出してきたんじゃ！」

バカだ……………ここにバカがいるぞ。

暇だったからって、こんなトコに一人で来たらダメだろ。

「……………まあいいや。それで嬢ちゃんの名前は？」

「テオドラじゃ！」

「元気でけっこ。俺はナガレ・オウミ、好きに呼んでくれ」

「じゃあ、おぬしのことをナガレと呼ぼう。決定じゃ！」

そんなこと大声で言われても、俺は反応しにくいぞ。

「それでテオドラ嬢、これからどうするんだ？」

「テオじゃ」

「……は？ なにが？」

「…ナ、ナガレには、テオと呼んで欲しいんじゃ／／／／」

テオドラは頬を赤く染め、モジモジしながら上目遣いでお願いしてきた。

……ぐはあ！ 流に精神的攻撃。急所に当たった、流に2000の萌えダメジ。

まさかテオドラがこんなコンボ攻撃を加えてくるとは……テオドラ……恐ろしい子……！！！！

と、「冗談もさておき、さっそく話の続きとしようじゃないか。

「……………テオ、これでいいか？」

「うむっ！ それでよいのじゃ！」

「話を戻そう。それでどうするんだ？ テオ一人で帰れるとは思えんのだが」

「それなら心配ご無用じゃ！ 帰るとき用のために、兵を呼び出す魔法道具を持ってきてる」

「……………それなら大丈夫か」

「大丈夫なのじゃ！」

「じゃあ俺は帰る」

俺がそう言って宿屋に帰ろうとすると、テオが俺の体にくっ付いてきた。

「いやじゃ、いやじゃ！ ナガレにもヘラス帝国に来てほしいのじゃー！」

「なんでだよ……」

「城に戻っても、暇なだけじゃ。もつとナガレと遊びたいのじゃー！」

「うーん……べつにヘラスに行ってもいいけど、どうしようかな……」

まあテオの近くにいたら、戦争とかにも介入しやすいな。

たぶん途中でどっかに旅に出ると思うけど、その時はその時で考えよう。

「……よし、別にいいぞ」

「やった、なのじゃー！」

その後、早速ヘラスに向かうことになったんだが、宿に荷物を置きっぱなしだったので、とりあえず荷物をとりに行った。

俺が荷物を取りに行っている間に、テオは帝国の兵を呼び出して、そこに帰ってきた俺と兵の間で一悶着あったが、テオの証言により

その場は収まった。

テオを助けたことにより褒美があるらしいが、最初は金を貰う感じだったので、それを变えて二年間の食事を保証してもらうことにした。

まあ俺の食事量を知らないからそれでいけたが、食事量を知っていたら断わられたかもしれん。

その後、俺は二年間の間へラス帝国を拠点に、活動を続けることになる。

続く

第6話 修行、じょんげー！

s i d e
流

さて、前回の続きといこうか。

前回、街にてテオを助けた俺。

その後、テオに着いてきてほしいということで、ヘラスにやってきた俺は、二年ほどヘラスにてお世話になった。

今回はその二年間のことを話していきたいと思う。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

ということまでヘラス帝国にやってきた俺、青海 流はヘラス帝国首都中心部にある城、その城内にある演習場にて、いつもどおり修行をやっていた。

ときは既に一年ほど経っており、最初は厳しい修行風景を見て驚いているヘラス帝国騎士の奴や、城に勤務しているメイドや文官などがいたが、それも一年ほど経てば大分落ち着きを見せていた。

体が大きくなってきてからやっている修行は、基礎的なトレーニングをはじめ、目を瞑っての格闘や空想敵を相手に動きを確認しながらの反復運動、ヘラス帝国に来てからは城にいる騎士に手伝ってもらい、騎士百人抜きをしたり、一人ずつ相手してもらったりと色々な修行をしている。

きょうは気を使った修行をしようと思う。まあ技の練習というわけだ。

最近になって界王拳が形になってきたので、それを早く完成させたいってのもある。

界王拳は簡単に言えば、身体中の気を一気に爆発させて、身体能力を向上させているわけである。

しかし界王拳は身体に負担をかけすぎるので、あまり長時間の発動は出来ず、一時的なものではない。

できるなら界王神がいるような重力10倍の場所があれば、もっと効率よく修行できるんだが……。

まあないものねだりをしてる意味がない。

閑話休題

「界ッ！ 王ッ！ け んッ！！！！」

俺の気合の声とともに、身体中の筋肉は膨れ上がり、身体の上には赤くなつた気が轟々と吹き上がっている。

この技は気を大量に消費して発動するので、敵を倒すなら短時間で倒さなければならぬ。

ちなみに俺はまだ界王拳二倍ほどしかできない。それ以上すれば身体が壊れる。

「だりやああああッ！！」

バガァン

俺は界王拳を発動したまま、演習場の所々にある人型的のを、拳で叩き壊していく。

ダアン、ボギャン、ズドオン……etc.

「ぐっ……らすとおおおおおお ツ!!!」

ボガアアアンツ!!!!!!

俺は最後の的をこなごなにぶち壊すと、界王拳を解除し地面へ大の字に倒れこむ。

「はあはあはあ………」

それにしても最後は危なかった。

身体中に引き裂かれそうな痛みが走ったし、界王拳が解除されそ
うだった。

「いつも思うが、めちゃくちゃな奴じゃのお……」

俺は息を整えながら声のほうを見てみると、そこには呆れたような顔をしたテオがいた。

「……ふう、見てたのかテオ」

「少し前からの」

俺は立ち上がると、テオの近くまで歩いていく。

「そうか……それで、何かようか？」

「いや、特にないぞ。近くを通りかかったのにな、気になっただけじゃ」

「そうなのか」

「そうなのじゃ」

話すこともないので、二人のあいだに沈黙が下りる。

「わらわはもう行く。帝王学やら、ようわからんもんを学ぶのでな」

「まあ、そう言っな。学はもってたほづがいいと思っぞ。いつか役に立つ」

「そうは思えんのじゃがな。面倒なだけじゃ……」

「頑張ってこい」

俺はそういうとまた修行を再開する。

「……まったく、筋肉バカじゃのお」

テオが何か言った気がするが、小さくてよく聞こえなかった。

「龍樹の事はわかったが、それがどうしたんだ？」

「以前、強い奴と戦いたいとおったじゃろ？ 龍樹が丁度いいと思っただな」

「守護聖獣なんて戦ってもいいのか？」

「父上に聞いてみたが、『龍樹と？ おもしろいから可決！』という感じで許してもらったぞ？」

「軽いな、おい……」

王様ってそんなもんなのか？ いや、絶対違うだろう。たぶんテオのバカっぽさは、その王様から引き継がれているな。するとテオは頬を赤く染め、モジモジしながら喋りだす。

「そ、それでじゃな……ナガレでも龍樹はキツイと思うんじゃない」

「……まあハッキリ言って、普通に負けるだろうな」

「だとすると、切り札はもっと欲しいじゃろ？」

「そうだな、ある方が有利になるし……」

「それでな、わらわに名案があるんじゃないが……」

「なんなんだ？」

俺が聞くと、テオはさらに頬を染め、ぼそぼそと小さく呟く。

「ば…ば…ばく……」

「ばく？」

「パクティオ　じゃ！」

「うおっ！？」

俯いてぼそぼそと喋っているかと思うと、いきなり顔を上げて大声で叫んだ。
いきなり叫ばれてはいくら俺でも驚き、心臓がバクバクいつている。

「わらわとパクティオ　せぬか？　いやか？　嫌なんじゃな、そ
うなんじゃろ……」

なぜかテオはどんどんネガティブ思考へと陥っていく。

というか俺はまだ何も言っていないのに、なぜどんどん悪い方向に
いつてしまうのか、不思議でならない。

「テオ、落ち着け。俺はまだ何も言っていないぞ」

「え？　そうだったか？　……で、するのか？」

「だが断る」

「断るんかい！！」

おふう… ナイス突っ込み。

「冗談……で何時すんの？」

「今からじゃー！」

横を見てみると何故か仮契約の魔方陣が……何時の間に。
俺とテオは椅子から立ち上がると、魔方陣の中に立つ。
テオが魔方陣を発動すると、魔方陣が輝き、なにか変な気持ちに
なる。

「じゃあ、少し屈んでくれ／＼／＼」

「ああ」

俺とテオでは身長差があるので、俺が屈まないと言が届かない。

「い、いくぞ……／＼／＼」

いま思ったが、この風景を他人から見たら、俺……変態じゃん。

パアッ………仮契約………！！

どうやら無事成功したようだ。まあ失敗するほうがおかしいか。目を開けると、二人のあいだに一枚のカードが浮かんでいた。

「テオ、コピーを」

「わかった」

テオはカードを手につくと、カードをコピーする。ちなみにわかっているとは思いますが、俺が従者でテオが主だ。

「えつと名前は……」

ア ティファクト：異界の英雄・七道具

名前はともかくカードの絵は、黄色い雲に乗った俺が、棒を握ってこちらを見ている。

周りにも色んな道具らしきものが浮いており、名前のとおり全部で七個あるようだ。

「来い《アデアット》」

俺の言葉とともに、周りに幾つかの道具が出現する。

まず目の前に黄色い雲
わかります。

…はい、筋斗雲ですね、

そして飾りもなにもない赤い棒

…はい、如意棒ツ！

扇子のような風を扇ぐものだろう物
思うよ？

…たぶん、芭蕉扇だと

小さな袋に入ったたくさんのお豆
ど〜ん！

…仙豆だよ、どんどこ

四角い容器に入っている幾つかの何か
ぽいですけど、なにか？

…ホイホイカプセルっ

微妙なデザインの玉がついた耳飾り
いつ使うんだ。

…見た感じ、ポタラ。

そして最後にやばそうな七つの玉
ボール。何で来てんだよ。

…おいおい、ドラゴン

正直言って全部やばいんだが、特に最後の奴はやばすぎる。
この世界のパワーバランスを崩しそうな品だ。これは即封印すべ
きだと思う。

「なんじゃ？ これは……よくわからんもんばかりじゃ」

そりゃそうだと思う。だって異世界のものだし。
とりあえずホイホイカプセルの中身を確認したいな。

「テオ、ここ以外で広い場所知らないか。人氣が少ないところで」

「ふむ、そうじゃの　城の裏にある岩山とかどうじゃ？　あそ
こなら大丈夫じゃろ」

「よし、行こう」

俺は着いてきそうなテオを近衛騎士に預けると、舞空術で城の裏
へと飛んでいった。

容器の中にはカプセルが全部で十個あり、空が六個、入っていたのは四個。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

一つ目の中身は人工重力装置の付いた半球型の建物で、千倍ぐらいまで重力があるようだ。

二つ目は鞆が入っており、中にはドラゴンレーダー、マイクロバンド、PPキヤンディー、変身スーツ&バンドが入っていた。正直最後のはいらない。あとわからない人はwikiで調べてくれ。

そして三つ目、何故か冷凍カプセル。これは死体を腐らせないようにするための物だ。

俺にどうしろと言っただろうか。こんなの持っていて、どうしようもない。まあいつか役に立つかも知れないので、一応持つっておくことにする。

最後に四つ目、タイムマシン。俺を何処に連れて行く気なのか…。

どうせならいつか、超に会いに行こう 自暴自棄

正直最初以外のものはいらない。
最後なんか俺にどうしろというのか。

とりあえず先ほど一度入った人工重力装置付きの建物に入ってみた。

「よし、まずは十倍から」

俺は持っている荷物やらカプセルをそこらへんに置くと、ボタンを押して重力を変えてみる。
ちなみに文字は日本語で表記してあった。俺にやさしい機械である。

……ブウン

「^じじ^おッ!?!」

ぬおおおおお!!!! お、おもい ツ!!!
十倍ってこんなにキツイのか、界王神やべえ。つか、パネエ。

とりあえず俺は頑張つて立ち上がると、部屋を歩き回つてみる。

…ズシン、ズシン、ズシン

一歩一歩が怪獣みたいな足音である。

重いつて言うけど、慣れてくると少し走れるようになってきた。

といつても殆ど早歩きみたいなもんだ。

「ファイト~~~~ッ!!! いっぱ~~~~ッ!!!」

まるで某りボビタンなCMの言葉みたいだ。

ただ俺のやる気は漲みなったので、結果としてよしとする。

しばらくの修行はこれでいこうかな？ やっぱこつこつ環境のほう
が鍛えられると思うし。

俺はその後三時間ほど修行をすると、一度ボタンをきつて城に帰
ることにした。

「はあ？ 半年、修行に漬け込むじゃと！」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「ああ、ちよつと龍樹に挑むには無理があるからな。修行だ」

あの重力を身体に馴染ませるには、短期間の修行では効率が悪い。
なので半年、というか『別荘』を借りるつもりなので、外の一時
間が中での二四時間とすると、半年＝約30×6＝180日、18
0×24＝4320時間、この4320は一時間＝一日とすると4
320日となるので、半年の時間で約12年間の修行が出来ること
になる。

「じゃあ『別荘』借りるから」

「あつ！ちよつとまで筋肉バカッ！」

俺はテオの声を無視すると、『別荘』へと向かう。
え？ 年とるんじゃないかね かって？ そこは秘策がある。

〃 〃

ここは別荘内、無人島の浜辺に俺はいた。
ちなみにこの別荘はネギがラカンを倒すために修行場としてテオ
に貰ったやつと一緒にである。

「出でよ神龍シエンロン!!」

ズズ ンッ!!! ズババア ンッ!!!

俺の一言で七つの玉が光り出し、空は暗くなる。
雲がないはずなのに、雷があたりに降り注ぐ。
玉から一筋の光が上空に伸び、そこに目をむければ巨大なアジア
圏に伝承されるような龍がいた。

『さあ願いをいえ。どんな願いもひとつだけかなえてやろう……』

「では……俺の身体が最盛期になったとき、この身体を不老とし
てくれ。可能か?」

『可能だ…少し待て……よし、願いはかなえてやった。では、さらばだ』

神龍はそういうと姿をけし、ドラゴンボールがどこかに飛んでいくとする。

ちなみにここは閉鎖空間なので、ドラゴンボールがどこかに飛んでいく心配はない。

また一年後に、この狭い別荘内を探せばいいので、随分と楽なものになりそうである。

「……にしても不老になっても、サイヤ人てわかりにくいよな」

だって最盛期に不老って、サイヤ人、若い時間長いからわかんないし。

まあいいや。さっそく修行でもしようかな？ 早く界王拳覚えてえ……。

俺はカプセルより人工重力装置付き半球型の建物を取り出すと、修行を始めた。

ちなみにこの建物には風呂やベットなど、設備は完備されているので結構便利である。

続く

第7話 修行、からのぉ

…龍樹ッ！（前書き）

めっちゃ長くなった気がする。

あと今回の話でアーティファクトの事が判ります。

さすがにドラゴンボールがあると、チートすぎますし？

作者でも、その辺は考えてありますのでご安心を。

第7話 修行、からのぉ

…龍樹ッ！

side流

ヒィ ハア ツ!!! みんな(読者)、元気にしてたか?
俺はかめはめ波で山が粉々になるぐらい、元気に過ごしていたぜ
ッ!

…さて、テンションも下げて、この十二年間の事を話そうと思
う。

え? 冒頭でなんであんなにテンションが高かった? 作者の
暴走だよ。

まあ気を取り直して、説明へといっしょ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

さて、俺が十二年のあいだにやったことといえば、アーティファクトの詳細の確認、十二年間ぶつ続けで年々増えていく重力の中の生活、そこからの厳しい修行など色々やってきた。

そしてわかったのが、アーティファクトの厳しい制約である。

まず第一に、一番問題だったドラゴンボールだが、一年を過ぎても石化が解かれることがなかった。

別荘に入って丁度一年経った頃、一度ドラゴンレーダーで調べてみたのだが、レーダーには何も映されなかった。

あれ？ おかしいな……と思いつつも、本格的に重力修行をする前に食料調達時に偶然拾った、ドラゴンボールらしき丸い石を調べてみた。

つんつんと突いてみたり、思いっきり壁に投げつけてみたり、「タツカラプト ポツポルンガ プピリットパロ」と言ってみたり、色々試してみたんだが石のままだった。

ムカついたので、うおおおおおッ！ と叫びながら、石に気を送ってみると、ホワアと淡く光った。

あれ、これ効果あんじゃね？ みたいな感じがしたので、修行を続けながら一年間気を注いで見た。

すると、あら不思議、石が少しガラスのような材質に！ といってもまだまだ石っぽかったんだけどね。

なのでその後、一度だけ建物から出て、島中を探しまくりました。あの小さな丸い石を。

正直しんどかった。だって何処にあるかわかないし。

しかし四つ目ぐらいから、周りに気を発すると石が淡く光って反応することに気が付いた。

……最初に気を流した時、淡く光ったんだから気がつけよ、と言うかもしれないが、俺はバカなので気が付きません。

そしてそこからは発見するスピードも少し早くなり、約半年ほどで全部見つけた。

建物に帰った後は、そのまま修行の合間に気を流す作業をいままで続けてきた。

現在の復活度は50%ぐらいだろうか、半透明な感じのドラゴンボールがある。

やはり強すぎる力には制約が付きものだろうな……まあこれから使わんと思うけど。

そして次に仙豆など消耗品。

これもドラゴンボールと同じで、気を流すと数が増えていった。

消耗品は仙豆を入れる袋などが本体らしく、袋に気を流しつづけると豆が増えていった。

ドラゴンボールよりかは短いけど、一つ増やすのに一ヶ月ほど掛かった。

PPキャンディーも同様で、一つ一ヶ月ほど掛かった。

タイムマシンも同様で、気を流すことによつてエネルギーが蓄えられるらしい。

ただしその量は膨大で、ドラゴンボールより溜まり方が超おそい。十二年間、気をながしているが、まだ10%にも及んでいない。超が持つカシオペアみたいに、世界樹の魔力を利用すれば、直ぐに時を越えられるかもしれない。

冷凍カプセルもエネルギーがいるようだが、これはあまり気を使わないっぽい。

マイクロバンド、変身スーツ&バンドは使った本人から自動で、気または魔力を吸い出すらしい。

人工重力装置の付いた半球型の建物はとくにエネルギーとかは吸われていない。

もしかしたら空気中の魔力をエネルギーとして吸っているかもしれないな。

ちなみに筋斗雲、如意棒は普通に使える。来いと呼べば来るし、伸びると言えば伸びる。

初めて如意棒を伸ばした時は、普通に感動したね。思わず叫んじ

やったよ。

筋斗雲も自分の気を使わないから、移動するとき便利だし。

みんな知らないかもしれないけど、舞空術っておもいつきりとはすと、結構、気つかうんだぜ？

筋斗雲って思ってたより速いしね。ジェット機より普通に速いのは、ヤバイよ。

閑話休題

さてアーティファクトの話はここまでにして、修行の話をしようか。

この十二年間の修行は、最初は型の練習や基礎的な動きの反復。

中盤前半から界王拳や技の練習。中盤後半は悟空がナメック星に行くときやっていた、自分に気功波を当てて一度死にかけてから仙豆の繰り返し。最後はそれを踏まえての技の練習。

最後ぐらいになると、重力は300倍になり、俺の身体は界王拳50〜60倍ぐらいまでなら耐えられるようになった。

しかし正直言って、これでも帝都守護聖獣である龍樹に勝てる自信はない。

だってあのバグのラカンと引き分けになるような存在だぜ？ 勝てると思うか？

そういえば言ってなかったが、俺の服は亀仙流胴着のままだ。なぜか身体が成長するたびに服が大きくなって、汚れても次の日には綺麗になっている。

正直不思議すぎる現象だが、全然不便でもなんでもないので、俺としては最高だ。

とりあえず話もここまでにして、早速重力装置を切るとするか。

カチッ……ブウウウウン……

「……………ああ……………これはヤベエ……………」

言葉がないくらい気分は最高だ。

自分の体重を感じないほど、俺の身体は軽くなっている。

……………よし、あれやってみよ。

俺は転がっている石を持つと、前方へおもいきり投げる。

シュンッ！

俺の右手には、先ほど投げた石が納まっている。

……………おお……………感動した。この速さは半端なく男心をくすぐる。

感動もいいが、そろそろ別荘をでないとテオにぶっ飛ばされそう
だ。

というか入るとき無視したから、絶対ぶっ飛ばされるな、これは。

俺は荷物をすべてカプセルに戻すと、魔方陣にのって別荘の外へ転移した。

魔方陣を通して外に転移してみると、外はまだまだ明るく、時間的に昼頃だった。

いまなら昼ご飯を食べていると思うので、いつも行っているであろうテラスへと行くことにした。

俺がテラスにやってくると、そこには椅子に座って口一杯にサン

ドイツ子を頬張る褐色幼女がいた。

俺が近づくとテオも気づいたのか、少し目を見開きながらもサンドイツ子を頬張っている。

……というかどれだけサンドイツ子頬張ってんだよ。とりあえず止まろっぜ、な？

「ふあふあふえ！ いふ、ふえふえふいふあんふあ！ （訳：ナガレ！ いつ出てきたんじゃ！）」

「いや、まず食べるか、喋るか、どっちかにしろよ。……あと質問に答えるならさっき出てきた」

「んぐんぐ……じくん……ってわかるんかい！」

いきなりつつこまれた。

「なんとなくな。それ何個か貰っていいか？ ハラ減ってしょうがねえよ」

「いいぞ。というかこれでは足りんじゃない。追加で何か頼ませよう」

「すまん」

「これも一応褒美に入っておるしの」

ちなみに褒美とは、テオを助けた時の褒美である。内容は二年間の食料の保証。

簡単に言えば、二年間帝国では夕飯を食べるということだ。すると気になったのか、テオは俺の身体を上から下へと眺めながら言った。

「にしてもナガレ……おぬし結構成長したようじゃな」

「そりゃ別荘使ったからな。歳もとるさ」

つつても不老だし、元々サイヤ人って若い時間が長いからあまりかわらんとは思っけど。

まあ13〜14歳から、いきなり20代になってりゃ見た目も変わるか。そんなに自覚はないけど。

ちなみに身長は150cmぐらいから、170後半〜180前半ぐらいまで伸びた。

あれ？ 確認してみると、別荘に入る前と入った後じゃ、だいぶ見た目変わってるわ。

「いいのお……わらわも早く、ボンツ、キュ、ボンツのお姉さん

になりたいのじゃ」

大丈夫、あと二十年ぐらいすれば、綺麗なお姉さんになれるはずだ。

「まあそう言うな。若いときにしかできない事もある」

「そうはいつでものお……王族なんぞ、勉強ばかりじゃ」

「はは、頑張れよ、お姫さま」

「筋肉バカは気楽でいいのお」

まあ筋肉バカではあるが、そんなに直球でいわれると、さすがの俺も傷つく。

テオも王族なりの悩みもあるんだろうが、俺には解決できない悩みだな。

俺は運ばれてきた料理を、ドンドン口の中に放りこんで行く。すでにテーブルにはお皿ツイインタワーが建造されている。もう直ぐで三つ目も建造できそうだ。

俺がいらないまに来たのであるうメイドさんは、そんな光景に啞然としている。

するとテオはテーブルにふにゃっと脱力しながら、俺に尋ねてきた。

「…それで龍樹には挑戦するのか？」

「もぐもぐ……んぐっ……ぷはぁ……もちろん！」

俺はチキンを片手に、テオに向かって右手の親指を立てる。

「そうか……いついくんじゃ？」

俺は右手を降ろして、チキンを食べながら考える。

「そうだな……明後日ぐらいには行ってみようかな」

「ほぉ……随分と早いんじゃないな」

「早く戦いたくてうずうずしてっからな」

やっぱりサイヤ人になってから、戦闘狂になった気がする。
まあまだ軽いほうだから、戦闘狂とは言わないかもしれないが、
絶対戦うのは好きになったね。

「こちらからも龍樹には伝えておくからの、準備は済ましておくんじゃない」

「ああ、わかってる」

ああ〜〜……早く龍樹とやらと戦ってみたいなあ〜〜。
やばえ暴れたくなってきた。どうやってこの気持ちを納めようかな。

「テオ、どこか戦う場所でもないか？」

「へ？ ……うん、そうじゃのお。最近、帝国の一部と『北の連合（メセンブリーナ連合）』の一部が、小競り合いをしていると聞いたのお。じゃからそこに行けば戦いがあるのではないか？」

それってもう少して戦争が始まるって事じゃないか。

絶対裏に「完全なる世界」たちがいるな。早く強くないとな
……。

「……そうか。流石に国同士の戦いには、仕事じゃないと行けないから、せつかくだけど止めとくわ」

「そうした方がいいぞ。国同士の戦いなぞ、何か裏がありそうじゃ」

なんかテオさん、この戦いの核心ついちゃってんですけど。

裏ありそうって、実際あっちゃうから困っちゃうよね。知ってる側としては。

そういえばこの国にも「完全なる世界」のスパイとかいそうだな……潰すか？

いや、無理だな。潰したところで、また新しくスパイが来そうだし。

もし潰して俺の存在がばれると、面倒なことになりそうだ。絶対。

「まあ龍樹と戦うのを待つとするかね……」

「それが一番じゃ」

俺は食後のデザートを食べながら呟いた。

デザート？ 特大ケーキだよ。超甘いよ、これ。

|||||||

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

そして龍樹との決戦当日。

俺はパクティオ カドや、必要な物をもつと、龍樹が住む山へとやってきていた。

山から結構離れているのだが、ここからでも龍樹のプレッシャーが俺に圧力をかけてくる。

怯ませるのが目的化は知らないが、サイヤ人には逆効果だ。

俺の心はこれからの戦いに対して震え上がり、俺の身体を燃え上がらせる。

「……………龍樹エ……………ぶつとばすッ！！！！」

俺は気を身体中に滾たぎらせると、舞空術を使いマツハで飛んでいった。

る。
俺の目の前には、巨大な身体をもつ西洋龍

…龍樹が佇んでい

……

……

……

……

……

……

……

龍樹の身体は、鎧のようなもので包まれていて、背中にある翼は飛ぶように作られているとは思えない。魔力が何かで飛んでいるのである。頭の上には二つの角が後ろに流れるように生えており、いかにも龍という感じがたまらなくカッコイイ。

俺もどっかで龍でも狩って、ペットにしてやろうか。できるものならしてみたい。

グルウ……

へ？ はやく戦わないのかって？ やってもいいならやってやるよ。

グルウ！

掛かって来い、小僧？ ぶち殺してやろうか、この龍……。
俺も早く戦いたくって、ウズウズしてんだ。やろうぜ …… 龍樹
さんよお…。

グルオオオオオオオオオオッ！！！！！！

「うおおおッ!!! 界・王・拳ええええんッ!!!」

俺は最初から全力全開、フルパワーの界王拳60倍でいく。

俺が界王拳を発動させると、身体中の筋肉は膨張し、噴出す赤く染まった気により髪がなびく。

「行くぞ……トカゲやるっ」

グルラァァァ!!

俺は咆哮とともに体当たりをしてきた龍樹を、上に跳んでかわすと、舞空術で空中で止まる。

突っ込んできた龍樹はそのまま俺の後ろにあった大岩に体当たりし、辺りに砂埃が上がった。

さすがにこれくれたばる事はないので、俺は警戒しながらも連続で気功波を龍樹がいるであろう場所へ放つ。

ビュン、ビュン、ビュン、ビュン、ビュン

龍樹はその気功波を気にすることなく、砂埃が舞う場所から空へ飛び上がると、こちらへと口をあけブレスを放ってきた。

俺はそれを気合で吹き飛ばすと、一瞬で龍樹の腹の下へ移動すると、思いっきり右ストレートを叩き込んだ。

流石に固くて鎧的なものが壊れることはなかったが、衝撃により龍樹は後方へと吹き飛ぶ。

俺はその隙を見逃さず、追いつちをかけようと、龍樹に近づいた。しかし龍樹の罠だったのか、俺が近づくとくるりと体を回すと、その勢いを利用して長いシッポを俺に叩きつけてきた。

モロに受けた俺は凄いい勢いそのまま飛ばされていくと、硬そうな大岩にぶつかり、そのまま岩を砕くと岩の中に埋もれてしまう。

「!?!? ……がつ…は…」

肺の中の空気が一気に吐き出された俺は、口から血をはきながら、息を整える。

しかし龍樹は時を待たず、追撃を加えようとこちらにブレスを吐き出してきた。

俺は岩を無視して急いで上に飛び上がり、ブレスをかわそうとする。

ギリギリのところかわした俺は、ブレスによって吹き飛ばされていく岩たちを確認しながらも、目の前の強者から目を離さない。

隙を見せれば一瞬でかたがつく、そんな感じの空気が俺の周りに

漂っている。

おもしろい……俺は単純にそう思った。このリアルさが俺に刺激を与えてくれる。

「……でも、さすがに龍樹は強いな」

どうこの状況を打破するか、どうすればコイツに勝てるのか。

「とりあえず、当たって碎けるだッ!!」

俺は考えるのを止め、龍樹の元へと飛んでいった。

.....

.....

.....

.....

そして6時間後、戦いはまだ続いている。
どちらも余力は十分に残っており、まだまだ決着がつく気配はない。

「太陽拳ッ！」

俺の身体から目が痛くなるほどの光が噴出す。

グルオオオオ！！

この戦いで初めて使ったので、一応効いてくれたようだ。
俺は稼いだ時間を無駄にせず、技を発動するため構えをする。

「効くかはわからんが、行くぞツ！！ か〜、め〜、は〜、
め〜……」

これは普通のかめはめ波ではない。

かめはめ波の第二段階目、『超かめはめ波』だ。

これをヘラス帝国の帝都に使えば、普通に街は消し去ることができ
るだろう。

まあ使う予定はないので、安心して欲しい。

「波あああああああッ！！！」

俺が両手を前方に突き出し、溜めに溜めた気を一気に放つと、極
太のかめはめ波が龍樹を襲う。

超かめはめ波が龍樹に直撃すると、貫通はしなかったものの、そ
のまま龍樹は後方へとかめはめ波と共に吹っ飛んでいき、山の麓に
ある遺跡 龍樹の住処のだが にたつ太い石柱にぶち当たる
と、石柱が衝撃で崩れ、龍樹の身体の上に降り注いだ。

これはやったか？ と思っていたのが油断だったのか、突然、崩
れた岩の中から極太のビームが飛び出してきて、とっさに左腕でガ

山から飛び出ると、回りを確認する。

しかし流の姿は見当たらない。グルウ？ と疑問に思いながらも、流を探す。

いっこうに姿を現さない流に、龍樹はあたりにブレスを吐こうとした矢先、流が姿を現した。

「ようトカゲ……身体の調子はどうだ？」

いきなり話かけてきたが、勝負中に会話は要らない。

龍樹は口をあけると、流にむかってブレスを放つ。

ブレスは流に迫ると、そのまま当たった。しかしブレスが当たった流は吹き飛ばされることなく、消えた。

突然のことに驚く龍樹、しかし周りはすでに囲まれていた。

「分身……いや、実体があるし影分身で言った方がいいか……」

「でも、それがお前にわかるか、俺にはわかんないけどね」

「まあ戦うならこれの方がいいだろ？」

「じゃあさあ

……」

第7話 修行、からのお … 龍樹ッ！（後書き）

ちなみに流の名案は、影分身ではありません。

次の話でわかると思うので、その辺はお楽しみに。

まあわかる人は、わかっていると幸いですけど。

第8話 傭兵（前書き）

すこし短い気も ……するけど、きにしないで…！
作者のライフは、もうゼロよッ！

第8話 傭兵

さて、ここはヘラス帝国中央にある城のある一室。
俺は、体中包帯まみれでベッドで寝かされていた。

「ちくせう。龍樹のヤロウ、次はぶつ飛ばす……」

一瞬、「あれ？ 一話とんでる？」とか思っただろう？
違うんだなこれが。決して作者が「あれ？ ちよっとめんどくせー」とか思った結果じゃない。

……まあこれからあの子の事を説明してやろう。といっても簡単にだかな。

あの子、影分身？ 4体で龍樹を攻めていた訳よ。それで勝てるとは思ってないし、フーか囷だったしね。本体は別にいて、実は元氣玉を作っていたんだけど……まあやっぱり見つかるじゃん？ それでちよっと小さかったけど、元氣玉を龍樹にむけて放ったんだ。したらあつちも対抗してきて、破壊光線のものを放ってきたわけだ。最初は拮抗してただけど、やっぱり未完成だし？ それにぜんぜん小さいし？ 普通に破壊光線に巻き込まれたわ。まるで悟飯のかめはめ波で消滅したセルみたいだったよ。セルの気持ちかわかつ

た気がする。

てな感じで結局負けたわ。

仙豆はって？ そんなモンつかつたら面白くねーだろーがッ！

サイヤ人の戦闘本能舐めるなよ？ 楽しく戦うことが一番じゃいッ！！

「なに言ってるんじゃないか……妾が様子を見にいかんかったら、危なかったではないか」

「いやいや、そんな簡単に死なねーよ」

聞いた感じでは、殆ど死んでんじゃないかね？ ぐらいの状態で倒れていたらしい。

サイヤ人だし。というか死にかけて復活したから、逆に強くなっただわ。マジすごいね。

「ま、これに懲りて、当分の間は修行でもするんじゃないな」

「言われなくても、今まで以上に頑張っていくぞ」

にしてもやっぱり強いわ、龍樹。ラカンもよく引き分けたな……バ

グめ。

つつても？ まだまだ時間はあるし、修行頑張っていくしかないか。

「修行はべつとして、これからどうするんじや？」

「そーだなあ……………」

うーん…………どうしよっかなあ…………なんか物語上、事件とかあったっけ？
そういえば戦争があるな…………よし、ちよつと戦場でもつろつくか。

「テオ、俺、旅出るわ」

「いきなりじゃのお…………なんでじゃ？」

「戦争でも始まりそうだし、適当にぶっ飛ばしてくるわ。それに
軍隊みたいな人数との戦闘ってやったことなかったから、戦ってみ
てーし…………」

「はあ…………ほんとに戦闘バカじゃな、おぬしは…………」

「褒めんなよ」

「褒めておらぬわッ!!」

いやいや、サイヤ人的には褒めてることになんじやね？

モノホンのサイヤ人ほど凶暴でもないから、それほど戦闘狂でもないと思うんだけどね。

「まったく……とりあえず何をするにしても、ケガを治すことじやな」

「わかってるよ」

テオはそういうと用事があるからと言って部屋を出て行った。

ケガといっても、すぐに治るだろ。サイヤ人の体って、なんか治癒能力高そうだし。

にしても戦争か……面白くなりそうだな。

ヘラスを出てからは傭兵として活動している。
クエスト受けて、任務を遂行して、お金を受け取る。そんな感じ。
いまは戦時中だから、傷ついた人のために薬草をとってきたり、
武器を作るための鉱石を調達してきたり、物資輸送隊の護衛だった
りと、戦う以外にもたくさんクエストがある。

俺は護衛対象に長期的に着いていくのが面倒なので、主にやって
いるのは戦場で戦うこと、その補助程度に薬草や鉱石を調達したり
している。

てな感じで傭兵生活を満喫？ しているわけだ。わけだが …

「なにを言ってるおるのじゃ、主は」

「なんでもねーよ姫さん」

なんかいたんだよねー、アリカ姫。

俺は傭兵だから金を多く積まれたほうに味方するから、あつち来
たりこつち来たりで、まあ両方の陣営にいたりいなかったりするわ
けよ。つっても強そうなやつがいれば、いくら金を積まれようとも
強そうなやつがいる陣営の敵になるわけだが。

そんな感じで今回はヘラスのほうでぶらぶら〜としていたんだが、
なぜかいた。姫さんが。

いや実際姫さんを見たことなかったから、最初はこいつ誰だよッ！
ってな感じだったんだが、聞いてみるとウエスペルタティア王国の姫さまで名前はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。まさかのアリカ姫登場に全俺が驚いた。

用件は調停役として戦争を終わらせに来たらしい。まだ火種は小さいが、少したてば大きな戦争となると予想して、早めに終わらせようとしたとか。でも失敗に終わったってよ。

まあそんな感じでその後、俺が強そうだという勘とも言える理由で俺を雇い、俺は姫さんのもとで調停役として働かせてもらっている。

「で、次はどうするわけよ。戦場に殴りこみでも行くか？」

「いや、まだ武力介入ははやい。まずは話し合いで決めるのじゃ」

「つつてもねえ …」

帝国も連合も話し聞こうとしないからなー、どうしようもないと思っけど。

「わかっておる。いずれ武力でかたをつけることになるじゃろっ。」

その時は頼むぞ」

「仕事はちゃんとするぞ」

ああ、早く暴れたいな　とか思ってるけど我慢はするぞ。

「というより、ナガレよ。最近食費がかさむんじゃが…」

「ある程度自給自足してるぶん、まだマシなほうだ」

そして火種は姫さん予想通り大きくなり、帝国、連合が本格的に
対立したのち、大規模な戦争が始まる事となった。

続く

第9話 紅き翼との接触（前書き）

けっこう久しぶりに投稿した。
まあいい感じだと思つので、よろしく。

第9話 紅き翼との接触

「波ああああ ツ！！！！」

チユドオオオオオンツ！！

俺がかめはめ波を放つたび、敵兵が突風に煽られた枯葉のように吹っ飛んでいく。こんな光景も最初のころは驚かれたが、いまでは見慣れた光景として特に驚かれはしない。それに達人級の奴らにとっては少し本気を出せば出来ることなので、別に俺が最強ってわけでもない。まあ世界的に見れば上のほうではあるがな…。

「誰か奴を止める！」

「し、しかし、『猿人王』相手では……」

相手側の指揮官が何やら言っているが関係ない。俺を止めるとか、

ラカンぐらい連れてこなきゃ止められるはずがない。つーか、猿人王とか言つな。確かに尻尾あるけど、一応人種的にはサイヤ人です。まあ言っても証拠がないから意味ないけど。

「おらおらおらぁッ！！ どいつでもいいからかかって来いやア
！！」

俺が挑発するが、どいつもビビッてんのか挑んでこない。

「……………チツ…しよーもねエ……………早めに終わらすか」

ふんッ、と体に力をこめると界王拳10倍まで高める。体の周りを真っ赤な気が包み込むと、筋肉が膨らみ、服を押し上げる。

「行くぜ？ 玉無しども……………」

ちなみにここはヘラス帝国南部にあるシルチス亜大陸、その南東に位置する……………なんたらハフトとかいう都市である。名前は気にならないのであまり覚えていない。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

ここはオステイア西部にある高級ホテル。
俺は体を休めるため、自室で食事を取りながらふかふかのソファ
でゆったりとしていた。

「ふう〜……疲れた」

「疲れているようじゃな」

「ん？」

ドアが開いたと思ったら、後ろには姫さん。ちなみにアリのかのほ
うだぞ。

「なんだ、姫さんか」

「何だとはなんじゃ。失礼な」

「そう言っつなよ。仲良くなったと思えや」

「ムッ…まあ、それもそうじゃな……」

まったくお固い頭をお持ちで。もっと柔軟に生きていってほしいもんだね。

「……で、戦渦は広がっていつてるわけだが、どうすんだ？」

「私もその事を考えていたわけじゃが、ヘラス帝国の第三皇女と密談する事になった」

「第三皇女？」

第三皇女……なんか引つかかるな。誰だったっけ？

「テオドラ殿じゃ」

「ああ……あいつか」

あいつそういえば皇女だった。お転婆すぎるから皇女って感じしないし、記憶に残らなかった。

「なんじゃ、知っておるのか？」

「姫さんと会うまでは帝国の城でお世話になってたからな」

「何故それを私に言ってない……」

「いや、別に隠す気はなかったけど、聞かれなかったから……」

「……まあ良い。一ヶ月後に会うことになっておる。主は私の護衛として着いてきてもらおう」

「……ことは、テオと久しぶりに会うことになるな。ま、あいつは変わってねーだろな。」

「うい、わかった。準備しよう」

姫さんはもう言っこともないのか、部屋から出て行くしよする。

「念らぬようじしておけ。それと事前にある協力者と会うことになっておる」

「ふくん、誰なんだ？」

姫さんはドア手前で振り向くといった。

「紅き翼、とかいったの」

〓 〓
〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓
〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

メカロメセンブリア
MM某所。

そこには近い将来、英雄として名を馳せるであろう紅き翼の面々が集まっていた。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してぞ」

紅き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドは少しメンド臭がりながらも、元捜査官であるガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグに今回の召集内容を尋ねる。

「会ってほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

ナギは疑問に思う。

「そうだ」

聞いたことのある声に紅き翼のメンバーは皆振り返る。

「マクギル元老院議員！」

「いや」

わしちゃう、と言いながらもマクギルは後ろに視線を向け言った。

「主賓はあちらのお方だ」

視線の先を見てみると、フードをかぶった女性らしき人と、同じくフードをかぶったガタイのいい男性が階段を上ってきた。

「ウエスペルタティア王国……アリカ王女」

「……」

「ん？」

ナギはアリカ王女に見惚れ、ラカンはその様子を見てぬふふと顔が笑っている。

ラカンは少し笑いながらもアリカに近づいていくと話しかけた。

「よう、王女さま。なかなかいい女じゃねーか」

アリカはラカンに視線を向けると、無表情のまま言い放った。

「気安く話しかけるな、下衆が」

ラカンもあまりのことに固まったが、一瞬でニヤニヤしだした。するとアリカの後ろにいた男性が動き出し、あれ？ ラカン殴られんじゃね？ とほかの面々が思っていると、男性はアリカの後ろに立ち腕を振り上げた。

「あーんパンチ」

「あぶしッ!？」

そのままアンパン的なヒーローの掛け声をしながら、腕をアリカの頭の頂に振り下ろした。

「「「え ツ!？ そつち ツ!!？」」」

まさかの暴拳に周りの人間はもちろんアリカ本人も驚いていた。ちなみにアリカはあまりの痛みに、しゃがみながら頭を両手で抑えている。少し涙目をしながら上目遣いで男性のほうを見ているのは……萌える。

「姫さんよ、その言い方は駄目だよな。仮にも協力者だぜ？」

「しかし……」

「しかもお菓子もねーよ。確かに下衆でボケで筋肉馬鹿だけど、そこは許してやれよ」

「いや、主の方が酷くね!？」

流石の言い様にアリカが壊れた。

「確かにお前の方が酷いな。お前が俺の何を知ってたよ」

ラカンもそこまで言われては、キレるとは言わないがムカムカはする。

「あゝ？ なに言ってんだ、お前。ダチの顔も忘れたっつーのか？」

「ダチ？」

男がフードを下ろすと、ラカンの顔が驚愕の色に染まる。

「まさか……ナガレか？」

「うるせエ、もっかいぶっ飛ばすぞ」

「噂には聞いてたが、強くなってんな。勝負しようぜッ！」

「話を聞いちゃいねエ……っーかお前も強くなってんだろ」

「なーに言っただよ、お前と戦えば……」

少し離れたところではナガレとラカンがギヤイギヤイと騒いでいる。つってもラカンが一方的にギヤイギヤイ言ってるだけで、ナガレのほうはあまり騒いではない。

「……しかしよ、なんでナガレがウエスペルタティアの王女とい
るんだよ」

「ああ？ ……あゝ…偶々戦場近くの街で出会っただけな。調停役し
てるとかで、護衛がほしかったって言っただけだよ。そんな感じだ
な」

「ふん、そんなこともあんだな『猿人王』」

「……殺す」

「ちよ……おま……」

ラカンは吹っ飛んでいった。

……

……

……

……

……

……

……

“帝国”と“連合”

二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきた王国の王女

『アリカ・アナルキア・エンテオフユシア』

彼女は自ら調停役として戦争を終わらせようとしたが失敗。力及ばず今回、紅き翼に助けを求めにきた。

「要するに戦争をやりたいやつらがいるんだろ。まーた『あいつら』か!?!」

「『完全なる世界』……帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイア内部にまで、シンパがいるようだ」

「世界全てが彼らに操られているようです……やはりこれは思った以上に根が深い」

俺は紅き翼が話しあいをしているのを離れたところから聞いていた。こいつ等は『完全なる世界』のことを死の商人や国際マフィアだと思っているようだ、そいつらに世界を動かすことは無理だ。

「ま、俺には関係ないな」

俺にとつちや相手を潰せれば、国際マフィアだろうが死の商人だろうが関係ねエ。敵と判明した奴らをぶっ飛ばせばいつかは終わるさ。といっても俺はわかってんですけどね、敵の正体。パツと終わっても面白くないから言わねエけど。

その後、紅き翼の頭脳派たちは『完全なる世界』についての内偵、調査向きではないラカン・ナギはバカンスか、首都での休暇を楽しむか、だ。

ちなみに俺は何をしているか、というと……

「何をしておるんじゃ、ナガレ。早く行くぞ」

「…はいはい。わかりましたよ、お姫さま」

……アリカとの買い物だった。つーかナギよ、もっと頑張れよ。お前身長の二倍のある荷物持ったことあるか？ ちなみに俺はいま持っている。まあ俺の身体能力を駆使すればふらつきもしないがな。

「あれはなんじゃ」

「しらん

「あれは？」

「しらん

「あれh

「しらん

「……………」

「ん？ なんだ？」

「黙り込んだアリカのほうを見ると、唇を尖らせてすねている。萌えた。」

「……………」
「なんで何も知らんのじゃ」

「メガ口なんて来た事ないからな」

「なんじゃ、そうならそうと早く言えばよかるつに」

「聞かれなかったからな」

「主はそればっかりじゃな……」

アリカは少しくたびれているが、そんな細かいことは気にすんな。

と、まあ平和な空気が流れているが、凄く不穏な気を感じる。

どこだ……屋根のうえ、路地裏、広場の中、どこを探しても不審な奴は見えない。殺気は感じるが、場所までは特定できない。

「……契約に従……に従え、炎の覇……たれ……化の炎、燃え盛る大……ほとば……」

がちゃ、と扉の開く音とともに部屋に入ったのはラカン。一番に目に入ったのは書類を手に唸っているガトウの姿だった。

「まさか…こんな……」

「よおガトウ、どうしたい。深刻な顔してよ」

ラカンはわき腹をボリボリ掻きながらガトウに尋ねる。

「ああ、ラカン。いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが」

ガトウは書類に視線を向けると、説明を続ける。

「これがどうにも信じがたい内容だな。いや情報ソースは確かなんだが…うゝむ」

ガトウの顔色は元々悪いがさらに悪くなっている。

「信じていいんだか悪いんだか……しかしこれが確かなら奴らの行動も……」

「んだ、ガトウ。ハッキリしねえな。もっとわかり易く言えや」

「いや、言ってもあんたにや興味ない話だよ、多分」

ガトウは一枚の書類を取り出すと、ラカンに見えやすいように机の上に置いた。

「それよりこっちの方が深刻だ。この男にも『完全なる世界』との関連の疑いが出てきた……大物だよ」

「こいつは……!？」

ラカンはあまりの内容に驚愕した。

「今の執政官じゃねーか!! このメガロメセンブリアのナンバ12までが、やつらの手先なのか!？」

「確証はない。外で喋るなよ?」

「ちツ！ ……めんどクセエことしやがる。死人はいねエだろうなア」

確認できる限りの住民は分身して逃がしたが……まあどうかはわからんな。

「大丈夫か、ナガレ！」

「ああ？」

振り向いてみると、そこにはでかい杖持ったナギがいた。

「大丈夫に決まってんだろ？ つーか何でお前がいる」

「えッ！？ ま、まあ偶々買いモンに出ただけだぜ！」

焦りすぎだろ、コイツ。まあナギが着いてきていたのは知ってたがな。アリカは流石に気づかなかったけど、俺は一応プロだしな。気づかないわけがない。

「まあいい。お前は魔法使いの方を追跡してくれ。どうせ追尾魔法はかけてんだろ」

「ああ、それはそうだけど……」

ちらちらアリカのほつを見るな。

「早くいけ。俺は護衛として姫さんを連れて行かなきゃいかん」

「わかった……」

少し落ち込んだな。ナギ、ざまあ。

ナギが浮遊魔法で飛んでいくと、少し離れたところから、俺の分身と一緒にこちらに向かってきた。

「敵はどうなったんじゃ？」

「いまナギが追っている。姫さんは一度アジトまで戻るぞ」

「……私も行きたいが、ナガレは許してくれんのじゃろ？」

「当然、何のための護衛だ」

その後、ナギが持ち帰ってきた確たる証拠を使い、アリカと俺は第三皇女との密談、紅き翼の面々はマクギル議員に報告、弾劾手続きするということで法務官に会うためマクギル議員の執務室に行くことになった。

ここから時代は、急速に、動き出す …

続く

第10話 『完全なる世界』

今回の密談は、ヘラス帝国の敵であるメセンブリーナ連合の連中に見つからぬよう、オスティアと帝国の間にあるニヤンドマという都市部に、隠れながらもやってきていた。連合に見つかると、中立のオスティアが帝国側につくんじゃないかと疑惑を持たれるので、今回のように隠れて、決して見つからぬようにしていた。

といても帝国もオスティアも『完全なる世界』の内偵が潜り込んでいると予想、つーか確定されているので安心など出来るはずもないわけだが……。

ニヤンドマではあるボロ宿屋の一室を借り受け、そこで我が雇い主であるアリカと、元雇い主のテオが交渉していくわけだ。普通ならこんな場所で密談をするなどと、思うはずがない。普通なら、な……。

「そっちは追跡されていない？」

「……ええ、私が認知できる範囲ではないはずです」

テオ側の護衛官に聞いてみるが、こんな言葉に安心できるほど馬鹿でもない。こいつだって俺がいたときには、見たことのない護衛官だ。新しく護衛官として任務に就いているだけかもしれないが、『完全なる世界』に送り込まれた手先という可能性もある。

「さっそくで悪いのだが、話を始めたいと思う。よいか？」

「それで構わんのじゃ」

アリカは早速話を切り出すと、二人で難しいことを話し始めた。内容がわからないという事はないが、王族としての勉強をしてきた二人の話は、元高校生には些か難しい内容だった。といってもテオは結構、勉強から逃げていたのだが……。

「……裏……」
「……じゃな……」

「……いや……これ……あ……かのお……」

はぁ……ねむい。俺は何でこんな所にいるんだろ……。テオがこちらをちらちら見てくるが無視だな。相手すんのもめんどクセエ。

というところで、俺は壁に寄りかかると目を瞑り、浅く寝ることに

した。寝ながらも気配を察知できるので、これなら敵が来ようが、魔法を放たれようが、俺がやられることはない。では、お休み……ZZZ……。

……

……

……

……

……

……

……

「な、なにをすんじゃ！」

……ん？　なんか騒がしいな……俺の眠りを妨げる奴は誰だ？

「テオドラ様。少し黙ってもらえますかな？」

脛を上げてみると、そこには護衛官によつて捕らえられているテオドラの姿があつた。首元には剣先が添えられている。

「おぬし何をしているのか、わかつておるのかッ！」

テオドラの問いかけに、護衛官は口を三日月に歪めながら言つ。

「わかつておりますとも。……ですが私には私の任務がありますので」

「任務？」

「ええ。テオドラ様、及びアリカ王女の捕縛。抵抗するならば手足を千切つても捕縛せよ、とね」

「……おぬし、だれの差し金じゃ」

くくく、と薄く笑いながら、護衛官は言つた。

「……『完全なる世界』ですよ」「はい、終了」「ぐうッ!?!」

ズゴオオン

「ぐ……あ……は……」

「雑魚がいきがつてんじゃねーよ。そこでオネンネするときな」

宿の壁にぶち当たり、あまりの衝撃に崩れ落ちる護衛官。その護衛官の視線の先にはナガレがいた。
つか、宿の壁どうしよう。

「……それで、どうするんじゃ、ナガレ?」

今まで黙っていたアリカは俺に問い掛けてくる。

タルシス大陸極西部オリンポス山『紅き翼』隠れ家。

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」

「警沢言つな、テオ。これでも屋根と壁があるだけマシだろう」

「なんだあこのジャリはよ。俺ら逃亡者に何期待してんだ……っ
ーか、ナガレ。おめえが一番ヒデエ」

「事実を言つたまでだ、筋肉」

「既に名前でもねエツ!？」

「名前で呼ばれたかったら、もっとマトモな行動をするんだな」

「そうじゃそうじゃ、この筋肉!」

「ぶっ殺すぞ、このちんちくりんッ！」

「何だ貴様！ 無礼であろう！」

「へっへ〜ん！ 生憎ヘラスの皇族にや、貸しはあっても借りはな
いんでね」

「なにい！ 貴様何者だ！」

ギヤイギヤイ！！ べろべろば〜〜

あそこまで少女と言い争える筋肉もないだろう。あの筋肉、マ
ジで小学生レベルの思考能力だな。

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。まさに幼女」

「……………」

幼女言つな。

「で、わかっていると思うが姫さん。連合にも帝国にも……それにあんたの国にも味方はいねェ」

俺はアリカに問い掛ける。それに続くようにガトウは言った。

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』……という可能性さえあがっています」

「やはりそうか……我が騎士よ」

「騎士じゃねーよ」

「そんなことどうでもよい。どのみち主は傭兵じゃ。ならば主は雇い主である私のものじゃ」

それどんなジャイアニズム？

「連合に帝国……そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな」

アリカは顔だけをこちらに向けると言った。

「じゃが……主と我らの仲間の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

「俺は無敵だが、こいつらは知らん」

「世界全てが敵 良いではないか。こちらの兵はたったの8人、だが最強の8人じゃ」

アリカは話を聞かない。まあ前に、ある騎士物語にでる姫と騎士に憧れているとか言ってたし、この状況に酔ってるのかねエ。興奮してるのかちょっと頬が赤いし。

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナガレよ、我が盾となり……剣となれ」

アリカはこちらを向き、透き通るような声で宣言した。

「……ふ」

……まったく困ったもんだね。俺のご主人は。

「報酬は弾んでもらうぜ？ アリカ姫」

アリカは剣を胸の前に掲げる。俺もアリカの前に跪くと宣言した。

「いいぜ。あんたが生きている限り、俺がアリカを守ろう」

アリカは俺の右肩に剣先を触れさせる。その光景はちょうど出てきた朝日と交わり、まるで一枚の絵画のようだった。

「……なあなあ筋肉。わしもナガレを騎士にしたいのじゃが……」

「あとでナガレにでも頼め」

おまえら空気読め。

「ということで反撃開始だ。」

「といっても誰が敵で誰が味方なのかは、見ただけではわからない。まあその辺は頭脳派の方々にお任せして、俺たちは『敵』だとわかった奴らをぶつ飛ばし、頭脳派が味方を増やし、と色々やって映画なら3部作、単行本なら14巻分くらいは行くであろう6ヶ月の死闘の後、遂に敵の本拠地を突き止め追い詰めた！！」 という俺は元々わかっている。

「その本拠地というのが……世界最古の王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』」

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「今更俺らを舐めてるとかありえんだろ。もっと畏とか奇襲に気をつける、筋肉」

「まだ筋肉！？ そろそろ名前で呼ぼうぜッ！」

英雄になったら呼んでやろう。まだ弄り倒してないし。

「ナガレ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「了解」

にしても若き総長は初々しくていいねエ……またアリアドネーでも行ってみよ。楽しそうだし。

「あんた達が外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぞ」

「ハッ！ それで、あの……ナガレ殿」

「どうした？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「ああ、そんなことか……別にいいぞ」

「尊敬していました」

ちなみにナギにも貰っていた。

そのすぐ後、空中に画面が出てきてガトウの姿が映った。

「連合の正規軍説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

つーか連合もメンド臭い奴らだ。そのくせ決戦が終わった後に、オスティアの保護とか言って占領紛いのことするし、腐ってやがるな上層部……いっそ潰すか。連合。

「ええ、彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

アルの真剣な顔を見ても、なんか信用しきれないのはどうしてだろうか…。

「ああ」

ナギは不敵な笑みを浮かべる。

「よおしつ野郎ども　行くぜっ!!」

紅き翼の面々は、ナギのかけ声とともに一斉に飛び出していった。

「……あの、ナガレ殿はいかれないのですか？」

「俺？　俺は最初外だから。大体減ったら中に突入するけど」

「は、はあ……」

「じゃ、一発ぶっ飛ばすから、味方を下げといて」

「わ、わかりました！」

よし、ということとで徐々に本気でも出しましょうかね……。

「ふんっ!!」

俺は両手を握りこみ、腰に構える。

俺は今までであった思い出を思い出しながら、感情を高めていく。実力が足りず敗北した自分への怒り、初めて依頼を達成した時の嬉しさ、大切なものをなくした悲しさ、前世への未練、いろんな感情を思い出し、凝縮していく。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!!!!

俺の体に金色の気が揺らめき始め、髪の毛が逆立ち始める。

そして気が最も高まった瞬間、俺は目を見開くと、感情を爆発させた！

「ハアアアアアアア

ッ！！！！！」

ブウワッ！！ ヒュンヒュウヒュン……

髪の毛が完全に逆立ち、金色に染まる。体からは溢れる気が炎のように噴出し、遠目からみる混成部隊の兵士達にはそれが神々しく見えた。

「……まだ発動するのに時間がかかるな……修行しないと」

「ナガレ殿……」

「ん？」

振り返ってみると後ろにはセラスがいた。

「どうかしたか？」

「あの、その……ナガレ殿、ですよね？」

「そうだが……それがどうかしたのか？」

「いえ、姿がかなり変わられたので……」

「まあ、一族に伝わる秘術みたいなものだ」

サイヤ人ですけどね。一応伝説です。ちなみにスーパーな野菜人になれたのはけっこう偶々である。ラカンにご飯取られて、めっちや怒ってたらいつのまにか逆立っていた。

あ……ありのまま、起こった事を話すぜ！

『料理取られて怒っていたと思ってたら、いつのまにかスーパーな野菜人になっていた』

な……何を言ってるのか、わからねーと思うが、俺も何が起こったのかわからなかった……。

大猿だとか野菜人だとかフリーザ様だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

ま、そんなことは置いといて。

「じゃ、ちょっと離れとけよ」

「は、はい！」

俺はセラスが離れるのを確認すると、お馴染みの構えをする。

「死ねクズども … か〜、め〜、は〜、め〜…」

俺が気を溜めるほど、手のひらの間からは目を開けられなくなるほどの光が漏れ出している。

「 …… :: 波アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

かめはめ波は両手の間から解き放たれ、そのまま直進すると、迫ってきていた敵のど真ん中に突っ込んだ。

ズズウウウン……カッ……ドガアアア
…

見るッ！ まるで敵がゴミのようだッ！ なんて言ってみる…。

「にやあああああ！？」

まあ何故かセラスは後ろでオカシクなってるし？
う〜ん…… 見た感じ大体全体の6〜7割ぐらいは減ったかな？

「ここは任したから、じゃあねー」

「にやああああ……ってナガレ殿ー！？ 行ってしまわれるのです
かああああ……」

どんどんセラスの声が遠くなっていったけど、まあいいや。

「死ね死ねミサイル　　ッ!！」

中に突入するついでに潰しておくか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「ふう.....到着つと」

さっきなんか大きな音が鳴ってたけど、まあナギ達ならボスを倒せるわけだし？ ほっといてもいいか…… 実際は倒せてないけど。

そういえば黄昏の姫御子とかいう女の子が捕まってるんだっけ？ アリカの妹らしいし、その子を探しに行けばいいか。えっと…… 大体の気はあつちに集まってて、一つだけ離れてるのがあるな。多分そこだな。よしいこう。

「はい、どーん」

俺は下に行くため、床を壊していく。これは仕方ないこと。あとから請求されても、俺のせいじゃない。

それから数分経つころ下のほうに行くと、なんか幼女が浮かんでいた。

「おー、いたいた。幼女、起きなさい。つーか起きろ」

ぺっぺっ

「……いたい」

「お？ 起きたか幼女」

「あなた……ダレ？」

「ナガレって読んでくれ。お前は？」

「アスナ。アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ
ユシア」

「うん、長い。アスナで」

流石になげーわ。もうちよっと短くしてもよくな？

「っーことで行くぞ」

「……ぶっっっっ」

「そとそと。ほら、敵来たら面倒だから早く行くぞ」

俺としては戦いたいけど、まあアスナがいると危ないし。

「わかった」

アスナは俺の背中に引っ付くと、よいしょよいしょという感じで上ってきた。首に手を回すと、落ちないようにピタッとくっついて
いる。

「じゃあ急いで出るから落ちんなよ！」

「れっつ・ごー……」

……なんかこのアスナちょっと違うくね？

俺はアスナが落ちないよう、ある程度のスピードを出しながら墓
守り人の宮殿から脱出した。

その後聞いたんだが、紅き翼はアスナを探していたらしい。戻っ
てきたらアスナがいたので、何で言わなかったのかとみんなにボコ
られた。逆にボコり返したが。ちなみにアスナを連れて行っても術
式は発動し続けていたので、アリカやテオドラ、MMのリカードと
か言う奴がなんか反転封印術式みたいなものを発動して止めていた。

あ、そういえば落ちるんだっけ？ オスティア……。

続く

第11話 戦後状況（前書き）

なんか途中で途切れてたので、再度書き直し。

めっちゃ疲れた。でも投稿したのでよろしく。

第11話 戦後状況

世界の大危機は回避され、世界を戦火の混乱に陥れたとされた一団とその首領は退治された。そして、ナギとその仲間である紅き翼、そしてその協力者である俺こと、ナガレ・オウミは魔法世界に知らぬ者なき英雄となり世界は平和となった。

そういえばなんか平和式典的なことがあったらしいが、そんなのは面倒なので出ていない。ちよつくら用事もあるしな……。

「よお姫さん。そんな仏頂面してどうした？」

ここはオスティアの王宮から遠く離れた離宮、その庭園にアリカはいた。

「ナガレか……いや……」

アリカは目線を合わさず、動揺を隠したように言った。

「まあいい……戦争も終わったし……つっても、まだ報酬は貰ってねーがな」

「そのことはわかっておる……金銀財宝、何でもくれてやるっ」

「金銀財宝ね……それもいいが、俺にはほしい物があってな」

「何でもくれてやるっ……言ってみせよ」

ほほ、何でもくれるのか。太っ腹だね。

「いや……まだいい。後々教えるから、待っとけ」

「そうか……わかった」

話し終わると、両者の間に沈黙が落ちる。何ともいえない緊張感。アリカは俺の後ろまでくると、背中に抱きついてきた。

「ナガレ……」

「……なんだ」

「もう少し……もう少しだけ……私の傍にいてはくれぬか？」

アリカは弱く、そして儂く、囁くようにいった。

「……なあ姫さん」

「……なんじゃ」

「俺は言ったよな。あんたが生きてる限り、あんたを守りつづけるって……」

「……」

「あんたが望むなら、契約延長してもいいんだぜ？」

……なんか俺、めっちゃ恥ずかしいこと言ってんな。

「……くす」

「…何笑ってやがる」

「いや……意外とナガレは不器用じゃと思ってな」

「……あんただけには言われたくねーよ」

姫さんほど不器用な女は見たことはねー……。

「わかっておる。だからこんな風にしか、気持ちを表せぬ」

わかってんならいいけど。

「……で、結局どうすんだ？ オスティアは、直に落ちるぞ」

「知っておったか……当然、契約延長じゃ」

「了解」

ズズウウンツ！

「せいやッ！」

ドゴオオンツ！

避難誘導しながらも、逃げていく市民を助けるため、安全な逃げ道を確保するためにも、俺は落下してくる岩石や、倒壊した建物の瓦礫を破壊していく。

現在俺がいるのは、貧民や不法移民してきた者たち、訳ありな奴らが住んでいる浮遊島、貧民島に来ていた。ここは街の構造が複雑な上、国には把握されていない奴らが多くいる。王都近辺の避難誘導は、王国騎士の奴らがいるし、俺の分身体が十数体はいる。

ここはどうかやら避難作業が遅れているようで、王都の方はほかの奴らに任せて俺がやってきた。まあ王都の方は順調に進んでいるから、ここを終わらせれば大体の奴らは助けられる。

「うわッ!？」

っと考え事してる場合じゃねーな。

声のした方を見ると、そこには3人組の少年達がいて、一人は瓦礫でつまずいたのか、倒れこんでしまっている。運の悪いこと

に上からは、落下してくる大岩が……。

「ちッ！」

俺は瞬間的に少年達の元へ移動すると、頭上へと手のひらを掲げる。

「消えてなくなれッ！」

直線ではなく、広がるように放った気光波は、落ちてきた大岩を気の奔流に巻き込み、砕くことなく塵となって消しさった。

「大丈夫か、坊主」

「……え……は、はい！」

……にしてもこの少年、すげー髪型してんな。トカサって中々なもんだぜ？

「……はもうじき落ちる。さっさと逃げろ」

「最も的確に市民を救えるよう最大効率で舟を回せ！！　ただし！！」

アリカは一度止めると、強調するように言った。

「捨てて良い命はない！！　一人も救ってもらすな、これは厳命じや！！」

そこに焦ったようにクルト　クルト・ゲートル　が近づいてくる。

「貧民島の避難作業が難航しています。このままでは！！」

「理由は！？」

「街の構造が複雑な上…不法移民が多く、全住民の把握が……」

「……………」

アリカの額に汗が垂れ落ちる。そして決断するように言った

「わかった！ こころは任せる！」

「陛下はどこへ！？」

突然出口へ向かうアリカにクルトは焦った。

「貧民島は、妾が直接赴き島ごと不時着させる！」

「しっかし」

「妾の魔法なら、この魔力消失現象の中でも無力化されぬ」

「いけません女王陛下ッ！」

クルトは行かせまいと止めようとするが、アリカの足は止まらない。
い。

「その必要はない」

アリカは声のするほうへと顔を向ける。そこにはナガレこと、俺

がいた。

「なぜじゃ！ この時にも民が死んでいくのだぞ！」

「熱くなるなアリカ、冷静になれ」

「しかし……」

「安心しろ、貧民島の避難は大方終わらせている。あと数分もすれば全員避難できる」

「そうか……ナガレには引き続き、避難誘導をしてもらいたい」

「言われんでもするさ。アリカも無理はすんなよ」

「ああ……ありがとう」

「……………」

そんな光景を、クルトは悔し涙を流しながらも見ていた。哀れクルト。負けるなクルト。しかしながら君の恋は終わってます。

戦後、災害復興支援の名目で派兵されてきたメガロメセンブリア軍は、王国を実効支配するつもり満々だったので、俺はアリカと相談してそれを拒否。かわりに帝国にツテのある俺がテオに頼み込んで、王様に支援してもらうことを確約。帝国には色々援助してもらっている。

「ホントだつて、俺達見たんだよ！ ナガレ様が俺達を護ってくれたんだつて！」

「というか助けてもらいましたしねー、とトカサ少年の隣の褐色少年も言つ。」

「アホトカサ！ 英雄であるナガレ様が、俺達下々のために直々に出向くわけねえだろツ！」

「うっ」

ホントなのになー、とトカサ少年はバルガスに殴られた頭を摩る。

金もツテもないオステイアの数百万の民は、行くあてがなく難民となつてしまつている。既に数十万人ぐらいが周辺各国へ流出した。その事を聞いた俺はアリカに助言し、『新オステイアの再建』を難民キャンプにて宣言。そのすぐ後に魔法世界全土にも宣言させた。

新オスティアの国土は、王都から離れていて魔力消失現象に巻き込まれなかった、王族の元離宮。離宮は、人一倍大きい浮遊島を中心に、幾つかの浮遊島が周りに連なっている。

さらにその周辺には、魔力が減少する前に俺が移動させといた、小さ目の浮遊島がいくつか浮かんでいる。流石の俺も25キロは長すぎた。ちなみスーパーな俺に変身してから動かしている。

新オスティアに戻ってきた民の数は、難民数百万のうち、半数以上が入国している。住民達にはそれぞれに別れてもらい、住宅やいろんな設備の建設など、復興の手伝いをしてもらっている。

アリカは自分が新たな王として、新オスティアを建国してもよかったのだろうかと悩んでいたが、俺としては難民を放っておくほうが問題なので、アリカにもそんな感じで納得してもらった。

まあ建国に関してもMMがいろいろ言ってきたが、そんなもんは知らん。俺としては別に武力で解決してもいいので、ウザくなったら元老院の害老どもを黙らせればいい。

後々、戦争の原因とか、『完全なる世界』に關与していたとか、父親殺しとか色んな理由をつけてイチヤモンつけてくると思うが、別に証拠も何もないのでこちらもいろいろ理由をつけて黙らせようと思う。

続く

第12話 決断

「奴隷公認法？」

戦争が終わってから大体2ヶ月ほど経ったころ、新オステイアの王宮の鍛錬場にて技を研磨していたところにアリカがやってきて、俺にそう言ってきた。

「そうじゃ。各国へと向かった難民達は職がなく、貧窮するばかりじゃ。そこで奴隷になる事を前提に、奴隷の安全や食を確保してもらおう法律じゃ」

「ふん……アリカはそれでいいのか？」

「……良いわけ、ないじゃろっ」

アリカは表情を歪めながらも言う。

「そうか……とりあえずその法律は置いて、俺に任しとけ」

「なッ!? それはどっいうこと ……」

俺は鍛錬をやめると、舞空術で鍛錬場から飛び去っていく。アリの声は遠ざかっていった。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

「っーこと、助けてくれ」

「何がっーことなのじゃ!」

「ここはヘラス帝国、その宮殿にあるテオドラの私室である。」

「いきなり窓ガラスから入ってきたと思うたら……何事じゃ？」

「いやー、カクカクシカジカでな……」

「ほうほう……奴隷公認法とな？」

今のでわかったのかよ……。といつつ事前に知らせてるんだけどな！

「まあアリカは納得してねーんだけどよ。なんか他にいい案はねえかな」

「うーむ……この麗しき少女には難しい話じゃな」

自分で何言ってるんだよ、幼女。窓から落とすぞ。

「幼女言っつなッ！」

「どうした？」

「いや、何か不穏な気を感じたのじゃ」

最近は幼女も心を読めるようになったか……時代は進むもんだ……。

「なに老人みたいな目をしとるんじゃ」

「お前よか歳はいつてるさ」

「まあいいがの……それよりいい案があるんじゃが」

「ほほお？ 聞かせてもらおうか……」

「うにょにょにょ　ほほお　うにょにょにょ　ほほほおー　うにょにょにょにょにょ！　な、なんだってー」

「　　うにょにょにょ」

「そいつはいい案だな。その案、いただきス リートツ！」

「と、突然どうした!? 頭がイカレたか！」

「いや、俺の熱き情熱が溢れだしたのさ」

「つか頭がイカレたとか……その角、貰い受けるッ！」

「ギヤアアアツ！ 角を握るなッ！ 折ろうとするなッ！ ら、
らめえええええ ……」

「少女にらめえええとか言われても興奮せん。20年後きやがれ！
まあ外の護衛たちはハアハア言ってたがな……ロリコン乙。」

〃 〃

とまあ話はそれにそれだが、テオドラの案はこうだ。

現在、ヘラス帝国の国内復興率が60%。急速に復興しようにも、長きにわたって行われた戦争によって、国内の男性の人数が減ってしまったらしい。今は戦争に行かなかった若年層や、女性、無事帰ってこれた男性を主に復興活動を行っている。

そこで出てくるのがオスティアから来た難民たちである。難民達は各国に流出したが、史実より断然少ないし、ヘラスに向かった難民の数もあまり多くはない。そこでMMに向かったはいいが職のない難民達をヘラスに向かわせて、復興活動で職を得ようぜ！ 的な案である。

まあ復興活動が終われば、再度職を失ってしまうが、その時にはオスティアも大体の復興や、市民の住む住宅も増えていると思うので、来たい奴らはオスティアに来させればいい。

「とかいう案が出たので、決議をお願いしよう。アリカ議長」

「うむ」

椅子から立ち上がるアリカ。左手は腰に、右腕を前に伸ばすと、親指を立てて言った。

「のーぶるぶれむ、じゃ」

ノリノリですね、アリカさん。ちなみに決議とか言っちゃってるが、ここはテラスであって、当然2人でお茶を飲んでるだけであって、別に会議でもなんでもない。

「じゃ、各国の難民達に通達でもするか」

「／／／／／」

言った後に、テーブルに塞ぎこんで、頭から煙を吹き上げているアリカは放っておいてあげよう。耳まで赤くなっているが、可愛いのでOK。

ちなみにアリカにやらせたのは、当然俺である。ユー、やっちゃいなYO！ とか言ってみた。反省はしているが、後悔はしていない。可愛いは正義。

.....

.....

...

その後、各国の難民達の元へは俺の分身体が直々に向かっていた。その辺のよくわからない奴より、英雄が説明してるほうが行きたくなったりするんじゃないか？ みたいな感じで、実際殆どの難民達がヘラス帝国に向かっていた。移動方法はヘラスとオステアの移民船である。

既に奴隷になってる奴は、どうしようもないから放って置いた。まあ不法に奴隷にされていた奴は助けたがな。奴隷商人を武力で潰せばいいだけである。

「こんなもんでいいか？」

「うむ、これでよい」

アリカ姫も満足したようだな。

「……ナガレ」

「ん？」

声のした方を見てみると、テラスの入り口にアスナが立っていた。

「どうした、アスナ」

「……ん」

よちよちよち……うん……ようしょ、よいしょ……ふう

座っている俺に近づいてきたアスナは、俺の正面にくると足を上り、膝の上に座っている。

「おうおう、なんかあったのか？」

「(ふるふる)……」

「じゃあなんだ、寂しかったとか？」

「……………（こくり）」

可愛いな、アスナは。妹にしたいよ。

俺はアスナの頭に手を置くと、力を入れすぎないように撫でてやった。

「……………じー」

声を出さんでも睨んでるのはわかるよ、アリカさん。

「どうしたアリカ、嫉妬か？」

「……………（ぼそ）ロリコン」

「あゝん？ きこえんなあゝ（ニヤニヤ）」

アリカは顔を赤くしながら、ぼそぼそ何かを言っている。

「……………な……………なで……………」

そして決心したように、息を吸うと、上目遣い＋赤い頬＋少し涙

目+ボソボソのコンボ攻撃をしてきた。

「……………わ、私は…な、撫でて……………くれんのか？」

萌え〜、アリカ、萌え〜。

「そこまでせんでも撫でてやるよ」

ナデナデナデナデナデナデナデ

「……………ナガレは、意地悪なのだな」

「元々こんな性格なんだな。諦める」

「……………むう」

そう膨らむなよ、美人なのが可愛く見えるぞ。あれ、なんにも損してねーや。

「……………わたしも」

「……ふう……わかりましたよ、お嬢様」

俺はその後、左右の手で姉妹の頭を撫でつづけた。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

「アリカ……本当にいいのか？」

「アスナを守る為には、こうするしかあるまい……」

アリカは口の端から血を垂らしながら、苦しげに言った。

「俺がずっと守っていく選択肢もあるんだぜ？」

「それでも……普通の生活は送れまい……」

「……まあな」

ここはアスナの寝室。アスナは魔法の力によって、深く眠りについている。俺とアリカは、そこであることしようとしている。

「……しかし誰に預けるかが問題じゃな」

「……ガトウか詠春ぐらいだが、詠春は旧世界じゃ、魔法使いとは敵側の所属だ。無理だろう」

「ならばガトウか……ナガレは連絡を頼む」

「……ああ」

ナガレが部屋を出て行く。部屋には姉妹であるアリカとアスナが残っている。

「アスナ……お前の意見を聞いてやれんのは申し訳ないが、お前のためじゃ」

『記憶の封印』、それがアスナの未来のためにも必要であった。
アリカは眠っているアスナの頭に手を置くと、魔法を発動させる。

魔法を発動させるアリカの頬には、一筋の雫が零れ落ちていた。

続く

第13話 紛争(前書き)

今回は色々キャラが出てくるぜ！
作者の独自の設定もあるから、そこんとこ気をつける！

第13話 紛争

「それじゃあ、任したぞ」

「ああ、わかった」

俺はまだ深い眠りにについているアスナを、ガトウへと引き渡す。

「タカミチ、お前にもアスナのこと頼んだぞ」

「はい！ 必ず守ってみせます！」

その後、ガトウへと連絡した俺は事情を話して、アスナを引き取ってもらったことにした。アスナの記憶は、王族だったことと、今まで利用されていたことなど、性格に影響を及ぼしそうなことを消している。

一応、今は薬などによって止まっている体の成長が再び成長し始めたら、アスナは旧世界に行って普通の生活をしてもらうことにな

っている。その時には、魔法の事も記憶から消してもらおうように頼んだ。

「にしても、女王陛下も辛いだろうな……」

「まあな……でも、本人が決めたことさ」

「だな……他人が口を出すべきことではない」

ま、アスナには悪いが、俺達のこととは忘れてもらおうしかない。いずれ思い出すことになっても、それまでは平和に暮らしてほしい。

「じゃあ行ってくれ。じきに起きる」

「陛下にもよろしく言っといてくれ」

「わかった」

ガトウはそう言つと、アスナを抱え、森の中へと消えていった。

「よし……俺も帰るか」

「うっと思っ」

「……私もそのことは気にかかっていたが、なぜいま……」

「アスナのことも一段落したし、いま行かないと無駄な被害が広がるだけだからな」

「……………」

アリカはふむ、と唸ると、黙り込んでしまった。

「……そうじゃな。では行くがよい」

「多分長い期間帰ってこれんが、問題が起こったら連絡してくれ」

「わかっておる。そういえば……………」

「どうした？」

なんか他にあったっけ？

「報酬の事じゃが、どうするんじや」?

「ああ」

そういえばそうだった。後々教えるとか言って、自分で忘れてたわ。

「そうだな……欲しいもんだが……」

「欲しいものは？」

首を傾げなら聞いてくるが、言うべきか……。

「……いや、帰ってきてから言っわ」

「……」

アリカは呆れてものも言えないようだ。

「……まあよい。早く行って、終わらせてこい」

俺の目の前には戦いの傷跡が大きく残っている。地面に横たわる死体や怪我人、倒壊した建物、燃えさかる街並み。何度見ても気分が良いものではない。遠くではまだ戦いが続いているのか、魔法が飛び交っている。

「戦いを止めたいところだが、まずは怪我人からだな」

俺は魔法薬を取り出すと、怪我人のいるところへと向かっていく。

「…う…くあ…」

「薬だ、飲め」

俺は口元に薬の入っている瓶を近づけると流し込んでやった。怪我は一瞬で治るとはいわないが、徐々に回復していく。といっても安静が一番だ。

「とりあえずは大丈夫か…大人しくしとけよ？」

「…あ…ありが…」

「いいから、寝とけ」

俺がそういつとそいつは寝息を立て始めた。

「ナガレ殿！」

「セラスか、どうした？」

処置を終えた俺のところに、セラスが駆け寄ってきた。なぜセラスがここにいるか。それは約半年前、俺が紛争を止めようとしていることを噂に聞いたセラスが、数十人の戦乙女と治療術士をつれて俺の元へとやってきた。どうやらセラス自身も、戦後も続く紛争に心を痛めていたらしい。まあ、あとはファン魂だろうか。戦乙女と治療術士は全員女だし。

閑話休題

「ここら一带の怪我人は、一通り回収終わりました！ 現在は治療術士達のもよんで治療中です！」

「そうか、じゃあ俺は戦いを終わらせてくる」

「私もお供します！」

「足ひっぱんじゃねーぞ」

「もちろんですー！」

俺は舞空術、セラスはアリアドネー乙女騎士団専用の杖で浮かび上がると、戦場目指し飛んでいった。

……
……

戦場にて喧嘩両成敗した俺は、怪我人を収容をしている大型天幕の横に立ててある指揮官用天幕にてセラスの報告を聞き終えていた。

「にしても、終わらないもんだな」

「そうですね……何故殺しあおうとするのでしょうか。戦争は終わったのに……」

「納得できないことでもあるんだろうな」

ハッキリ言って、俺にはどうしようもないことだな。人間の心ほどわからないものはない。女心もな。

「ナガレ様！ ご報告したいことが！」

「入ってくれ」

俺がそういうと一人の女性が入ってくる。名前をセラフィ・セブ
ンシープという。戦乙女ではなく、治癒術士としてきている。この
女性はナギのファンらしいんだが、ナギと同じぐらいに俺も好きら
しい。ちなみにエミリィ・セブンシープの母親である。

「どうした？」

「倒壊した瓦礫の下から女の子が発見されたんですけど……」

セラフィは何か言いにくそうにも「も」している。

「問題でもあるのか」

「……実はその子檻の中に入れられて、しかも龍樹に連なる種
族なんです」

龍樹に連なる種族といえば、森の守護者とも言われる種族だ。頭
部には種族特有の特徴的な角が生えており、その角は万病の妙薬と
して闇市で高値で取引されていて、柔らかい子供の角はさらに価値
が上がると言われている。たぶんその子も角目当てで捕まっただ
ろう。

「マフィアか闇商人だな」

「でしょうね」

俺の言葉にセラスも同意する。

「どういたしましょう」

「とりあえず連れてきてくれるか？」

「わかりました」

セラフィは天幕から出て行くと、数分後には女の子を一人引き連れて戻ってきた。ロングヘアで角が生えている女の子である。

「……」の子か？」

「はい」

「…そうか。初めまして、俺の名はナガレ。お嬢さんの名前を教

えてくれるかな？」

「……ブリジット」

「そうか、いい名前だな」

まあブリジットって名前の意味もわからないがな。

「親御さん達がどこにいるかはわかるか？」

「……悪人面した男どもに殺された」

「……そうか、悪いことを聞いた。すまない」

「……いえ」

ブリジットは振り切ってるのか、それとも表情に出していないだけなのか、あまり動揺もしていない。

「……しかし、帰るところがないということか」

「木樹族の森に返せばよろしいんじゃないですか？」

「親御さんもやられたということとは、たぶん村も森もなくなってるだろう」

「そうですね……」

俺とセラスはブリジットに聞こえないよう小さく話す。

…まあ行くところがないのなら、アリアドネーにでもまかすかな？

「どこにも行く所がないのなら、アリアドネーに行くことになるが、ブリジットはどうしたい？」

俺はこそこそ話をやめると、ブリジットと向きなおし問い掛けてみる。

「……………あなたと」

「ん？」

「……………あなたと、一緒じゃ……………ダメですか？」

何故俺なんだ……。

「アリアドネーはいやか？」

「嫌ではないですが、種族の希少性からあまりいい視線で見られることはないですから……」

「……………」

複雑だな、種族間の環境も。まあ人間でも黒人と白人との間で差別もあったしな。

「それに比べて、あなたの視線は嫌ではありません」

「……………あんまり変わらんとおもうぞ？」

「いえ、ちがいます」

めっちゃキツパリ言われた。

「…まあいいけどよ。俺のお供はキツイと思っぜ?」

「望むところですよ(ふんッ)」

鼻息が荒い。つーかこの子ノリが軽い気がする。

「いいんですか、ナガレ殿?」

「まあ、いいんじゃない?」

商人に狙われるかも知れないが、俺がいる限りは危険性はあまりない。むしろ安全である。

「くッ……また敵が増えましたわね」

セラフィは何を言ってるんだろうか。まだ俺に好意があるかもわからないだろうに。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

そんな感じで紛争を止める活動は順調である。なので安心してく
れ。

あ、ブリジットもいつかオスティアに連れて行くと思うから、そ
んときはよろしく。

b y ナガレ

「……あやつ、女子^{おなじ}にしかあっておらんではないか」

ここ一年の近況を書いたナガレの手紙に、どこかモヤモヤとする
アリカであった。

続く

第14話 アリアドネー魔法騎士団候補学校

「アリアドネーに來ないかって？」

前回の出来事から月日はたち、約二年ほどの歳月が過ぎた。いまだ紛争が終わることはないが、その規模も徐々に小さくなっている。

そんなある日、アリアドネー乙女騎士団隊長のセラスから突然の打診があった。

「はい。英雄のナガレ殿に一度、講師としてアリアドネー魔法騎士団候補学校へと来てほしいのです」

「そりゃまたなんで？」

「まあ心構えとか、これまでの体験談を話してもらえたら、生徒達の勉強になるかと思ひまして……」

「別に構わんが…」

体験談といつても、そんな綺麗な内容でもないんだが……。

「本当ですか！　ありがとうございます！」

「つーか、なんでお前からそんな話があるんだ？」

セラスはえへへと少し恥ずかしそうに言った。

「実はこの度、アリアドネー魔法騎士団候補学校の教師に抜擢されまして」

「教師につて、騎士団の方はどうすんだ？」

「大きな戦争も終わりましたので、紛争のほうは後任の団長に任せようかと思ってます」

もう後任が決まってんのか、結構早いもんだな。

「一応除隊とはならず、籍は残ってるんですけどね。これからは

戦争体験者として、生徒達に色々な事を教えていきたいと思っ
てます」

「そうか……まああんまり気を張りすぎんなよ。程々がちょうど
いい」

「はい。でも、生徒にはビシバシいきますけど……」

「ふっ…勉強嫌いにならん程度にしといてやれ」

「うふふ、わかっていますよ」

そしてその一週間後、紛争のほうは後任の団長さん率いる戦乙女
旅団に任じた俺達は、迎えらしき移送船へと乗り込むと、アリアド
ネー目指して旅立った。…っと、アリカに手紙だしとかないとな。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

「ここがアリアドネーですか、平和そうなところですね」

「中立都市ですから、戦渦には巻き込まれませんでした。といっても『完全なる世界』のスパイなどは進入してたそうですが」

船旅を始めて早8日、窓から見える眼下には魔法学術都市であるアリアドネーの街並みが広がっていた。ブリジットの言葉どおり、あんな大きな戦争があつたにもかかわらず、街の中には走り回っている子供、談笑している奥様方の姿があつて、なんとも平和なことである。

「ブリジットもそう言うな。犠牲者が増えないだけでも充分さ」

「ナガレ様……わかっています」

「ならいいね」

できるなら戦争なんて起きないほうがいい。俺だって殺しより、強い奴と楽しく戦えるほうが好きだしな。

「もうすぐで着港します。荷物を纏めといてくださいね」

「ああ」

といつてもそこまで荷物もないが…。

その十数分後、無事アリアドネーへと着いた俺達は、早速アリアドネー魔法騎士団候補学校の総長へと会うため、セラス先導のもと総長の執務室のある学校へと向かった。

…

「初めまして英雄殿。私はアリアドネー魔法騎士団候補学校、総長のカナリアと申します」

俺の目の前には、成熟した体をもつ美女が立っている。中々のスタイルで、これならば異性の目を惹きつけてやまないことだろう。

「知ってると思うが、俺はナガレ・オウミ。ナガレと呼んでくれ」

「ではナガレ殿、と」

まあ、まだまだお堅いがそこんところはしょーがない。

「それで今回の件だが…」

「ええ、返事は伺っております。どうぞよろしく願いします」

「こちらこそ世話になる」

「えええ〜ッ！！ 英雄のナガレ様を見たあ〜！？」

ナガレがアリアドネーに来た日、魔法学術学校にある食堂でのと。周りではお腹をすかせた女生徒達がスプーン片手に食事をしている。声が聞こえたのか耳を澄ませる女の子もいるが、この騒がしい食堂のなか声が聞こえた人数は少数のようだ。

「しっ〜〜〜！！ 声大きい！」

「あっ…ごめんごめん」

「もう、騒ぎになったらどうするのよ」

毎度声の大きい友人 フィル・ランダー に、片方の女の子
ネル・ルネット は呆れたように言う。

「……いや、でも、そんなこと言われたら誰でも驚くでしょ」

「そうだけど、限度ってもんがあるわよ」

でも何故か周りには気にされてないのが、フィルの不思議なところだ。

「まあいいじゃん。それでどこで見たって言うの？」

「はあ……学校に来るまえに街の方に行ったんだけど、港のほうから歩いてきたの」

「でも有名人なら認識阻害のメガネとか掛けないかな？」

フィルの疑問ももつともである。

「なぜか掛けてなかったの。でもフードは被ってたわ」

「なんで気づいたの？」

「風が吹いたときに、チラッと見えたのよ。ナガレ様のお顔が…」

ネルはその時のことを思い出しているのか、いつのまにか惚けた

顔になっている。

「あの凛々しいお顔、逞しそうな身体、英雄たる覇気、全てが素敵だったわ」

「……ローブを着てるんなら、身体は見えないと思うんだけど」

「妄想よ」

「……」

まさかの回答に、フィルも固まるしかなかった。そこでネルは疑問に思う。

「……でも何故ナガレ様がアリアドネーに来てるのかしら」

「そりゃ用事があるからじゃないの？」

「そんなことわかってるわよ。どんな用事かって言ってるの」

ネルの疑問にフィルも困ることしかできない。なんたって個人の

「ほほお…ナガレがアリアドネー魔法騎士団候補学校の講師に。確か女子校だったはずじゃが…まさか…」

ナガレの近辺にまた女性が増える。アリカの心のモヤモヤは徐々に大きくなっていった。

続く

第15話 初めての授業

波乱の巻き起こった全校集会より、一日たった翌日。今日から講師としての生活がはじまる。

早朝から教師達との会議にて改めて自己紹介をし、軽く今日の日程や校内の問題についての話を終えた俺は、総長であるカナリアに連れられ、一時間目に講義をすることになっているクラスへと向かっている。

「今から向かうクラスはもちろん、この学校の子達は皆元気な子ばかりですから気をつけてくださいね」

「舐められない程度には頑張るよ」

「気を張りすぎてもダメですけどね？」

「わかっているさ」

原作の3 - Aみたく元気な奴らが多かったら流石の俺も疲れると
思っがな。

「……と、ここです。私が先に入りますので、呼んだら入ってき
てください」

「ああ」

カナリアは扉を開いて教室の中に入っていく。俺はしばらく待っ
ておかないといけないな。

.....

.....

...

「はいはい、静かにしてねえ」

アリアドネー魔法騎士団候補学校の総長であるカナリアが教室に入ってくることで、騒いでいた生徒たちは静かになる。

「先日の全校集会でも言いましたが、本日より先の戦争で活躍された英雄、ナガレ・オウミ殿がこの学校の講師として来てくれます。臨時として短い間ですが、色々な事をご教授されることになるのですから、くれぐれも粗相のないようお願いしますね」

はい、と元気な返事が女生徒達から返ってくる。カナリアはその返事に満足すると、ナガレを呼ぶことにした。

「ではナガレ殿、お入りください」

カナリアが呼ぶと同時にガラリと扉が開かれると、そこから長身で筋肉質な身体を持つ男性が入ってきた。当然ではあるが、ナガレ本人である。

ナガレは教室に入ると扉を後ろ手で閉め、カツカツと足音を鳴らしながら教壇の横まで歩いてくる。教壇の横までくると、女生徒が座るほうへと身体を向けると、そのピシヤリと閉められた口を開いた。

「女生徒の皆知っているとは思いが、俺の名はナガレ・オウミという。気軽にオウミ先生とでも呼んでくれ」

俺が自己紹介を終わらせると、わーきゃーと騒ぐものもいれば、泣く者もいるし、あまつさえ気絶する生徒もいる。まさにカオス。

「うれしいのはわかったけど、淑女としての慎みを持ちなさい」

カナリアも一応注意はしているが、しょうがないとも思っているのか、注意の言葉に怒気は含まれてはいない。

「こんなんじゃない授業にもならんな」

「他にもクラスはあるけど、多分みんな近い反応を思うわ。大変ね」

ネルは興奮しすぎてなのか、言葉が崩れてしまっている。

「わ、わたしサインもらおうかな……」

「それもいいけど、私はあの筋肉で抱かれない」

「あっそれいいかも……」

当然周りの女生徒も同じような状態である。皆、瞳がハートになっている。

「……………はあ」

フィルも心がドキドキしているが、流石に涎を垂らすほど興奮はしていない。フィルはどちらかというとナギ派である。でもナガレも気になるっちゃ気になる。結果フィルはミーハーであった。

「ナガレしゃま〜、ナガレしゃま〜、ナガレしゃま〜」

この友人は放っておくと壊れていくようだ。

「ネル…ネル…気を確かに。涎垂れてるよ」

「ナガレしゃま…ハッ…私はいつたい何を…」

どうやら気が飛んでいたらしい。フィルはネルの様子に呆れた。

「…ナガレ様を見た瞬間にオカシクなつてたよ」

「はて？ 記憶にありませんが」

「…まあいいよ。それで本物を見た感想は？」

フィルの質問に、ネルは親指を立てながら言う

「ぐっしょぶっ…！」

……はて、何処かにネジでも落としたかな？ フィルは思わず床を見てしまった。

「…最高って事だね」

「死んでもいいくらいです」

それはダメだよ、ネル。人生はまだまだ長いよ。

「とりあえず皆を黙らせないと、授業が始まらないよ」

「それもそうですわね、そろそろ黙らせましょう」

ネルはパンパンと手を叩くと、皆の注目を集めさせる。

「皆さん、ナガレ様も困ってるようですし、そろそろ静かにいたしましょうか」

皆も正気に戻ったのか、素直に黙りこくった。

「これでいいですわね。ではナガレ様、あとはよろしくお願いいたします」

ちなみにネルはこのクラスの委員長的存在である。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

あの子はしっかりしているな。たぶんこのクラスの委員長みたいなものなんだろう。つってもあの子もこちらを見て涎を垂らしてたが。

「皆も黙ったことだし、授業を開始しようか」

俺の言葉に女生徒たちもワクワクしたような表情をしている。

「授業といっても、俺はこれまでの体験談や、心構え的なことしか教えない。それにこの授業が初めてという事だし、この時間は俺に対して質問タイムといこうか」

はい、と早速一人の女生徒が手を上げる。

「なにかな？」

「ナガレ様はどこ生まれなんですか！」

「生まれか……」

……あれ？ どこなんだろ……。たぶんヘラス帝国の何処かだと思っただけ。

「……一応生まれはヘラス帝国となっている。孤児だったから親はいない」

嘘だけ。

「…あつすいません」

「気にすんな。この時代、戦災孤児のほつが多い」

本当に嘘だから。だからそこまで落ち込まないで。

「なんで戦おうと思ったんですか!」

また一人の生徒が質問をぶつけてくる。

「そうだな……大切な人を助けてやろうと思ったから、かな」

アリカやアスナ、もちろんテオドラも。紅き翼の連中は殺しても死なん。

「それって好きな人ですか?」

「ご想像に任せる」

「じゃあ好きな女性のタイプは」

「可愛い仕草をする女性が好きだな」

「紅き翼の人たちとは友達ですか？」

「どちらかといえば協力者だ。いまはライバルとも言える」

「ナギ様とナガレ様はどちらが強いですか？」

「近接戦闘なら俺のほうが強い。魔法を含めると、どうなるかわからんな」

「龍樹と戦ったって聞いたんですけど」

「一回目は負けたが、その後の戦いでは引き分けに終わった」

「じゃあ……」

「ああ、それは……」

「ああ…ナガレと会いたいのじゃ。いつナガレは帰ってくるのじゃ……」

天蓋付きのベットに寝転ぶアリカ様は、中々帰ってこないナガレにご立腹な様子であった。

続く

第16話 若きスナイパー

大きな問題もなく俺の講師としての生活は続き、およそ半年ほどの月日が経った。

最初こそ女生徒の皆は騒いでいたりしていたが、それも一月も経てば落ち着きを取り戻し始め、二月ほど経てば完全に落ち着いたと思われる。一部の熱烈なファンの子達はいまだ熱く燃え上がっているが、授業を進行する上では害はないので放っていた。

そんな生活の中のある休日でのこと。俺は軽く荷物を纏め、鞆につめるとそれを背負って部屋を出た。

「ナガレ殿、どこかへと出かけるのですか？」

「ん？ ……なんだ、セラスか。いや、ちょっと用事ができてな」

声をかけられたので見てみると、視線の先にはセラスがいた。

「いつ頃お戻りに?」

「半月ほどは帰られないと思う。カナリアにはもう伝えてある」

「そうですか。お怪我のないようにお気をつけて」

言うことは言ったので、俺は歩き出す……おっと、もう一つお願いがあるんだった。少し遠目のところにいるセラスに向き直ると大きな声でハッキリといった。

「ブリジールは置いていくから、世話頼むな!」

「ええ!? そのことは聞いてませんよ!?!」

聞いてないも何も、言ってますんから。

「ちなみにブリジールには言っていないからよろしく」

「ナガレ殿待ってええええ ……」

セラスの声は遠くなつていく。だつてブリジュールは着いて来ようとするから言つてないんだ……セラス、頼んだぞ。

〃 〃

皆も気になっているとは思つが、半月もかかる今回の用事というのは、一つは紛争の様子を見に行くこと、次にオステイアに一時戻ることぐらいである。

紛争のほうはなんか強い奴がいるというので様子を見に、オステイアのほうはアリカが毎月送ってくる手紙に、オステイアの様子とか相談事とか大事な案件が書いてあつたりするんだけど、何故か最後の行にアリカの思考が漏れ出したのか。ナガレに会いたい、ナガレに会いたい、ナガレにアイトイ、ナガレにアイトイ、ナガレ……と小さく書いてあつたのが気になつたからだ。

それを読んだ俺は、アリカがヤンデレ化したに違いない、と手紙片手に恐怖した。小さな声でナガレニアイトイと聞こえてきそうで、夜はチョー怖いのである。これは会いに行くしかないと思つた。

「……まずは、紛争のほうからだな」

「っちは早めに終わらせないと、アメリカに呪い殺される。ブルル……ち、寒気が。」

……

……

……

……

……

……

……

「ここらあたりかな？」

ここはシルチス亜大陸にあるエルファンフト、その辺境にある街に俺はいた。ここらは数ヶ月前までは紛争が続いていた地域だ。現在は復興活動中で簡易修理された家や、家が潰れてしまった人のためのテントが張られていて、その様子が伺えられる。

そういえば強い奴がいるとは聞いたが、どんな奴かはわからない……どうしたらいいんだ。

「……とりあえず聞いてみるか」

という事で聞き込み。

「強いやつ？　うちの母ちゃんだな」

「知らないなあ、強い奴なんていっぱいいるし」

「オレ、オマエ、マルカジリッ！」

なんか一人変な奴がいたが、特にいい情報は得られなかった。ち

なみに最後の奴は吹っ飛んでもらっている。

「強い奴？ ああ、あのお嬢ちゃんのことかな？」

「お嬢ちゃん？」

その後何人が聞いているうちに、それらしい情報にありついた。それにしてもお嬢ちゃん？

「ああ、なかなか強い女の子だな。飛び道具とか、武器を巧みに操っていたよ」

「その子がどこにいるかわかるか？」

俺が作業着姿のオッサンに聞くと、オッサンは一つの建物を指差しながら言った。

「確かあの宿に止まってるはずさ。明日には出て行くとか聞いたけど」

「わかった。ありがとう」

俺はオッサンに礼をいい、その宿とやらに向かう。
宿らしき建物に近づくと、一人の女の子が宿の扉から出てきた。

「っ……！？」

「この子……悪魔か？ この子から微かに悪魔の気配を感じる。」

「ん？」

俺が驚いて立ち止まっていると、視線に気づいたのか女の子がこちらを向いた。よく見ると女の子は、かなりの美少女で、髪はロングヘアの黒、肌は褐色で、瞳が赤色、年齢は10歳前後だと思われる。

「どうしたんだい、お兄さん」

「……いや、少し目玉がね」

「そうかい、ならいけよ」

女の子はそういって立ち去る様子。

「ちょっと待ってくれるか？」

「……いまから食料を買おうと思ってるんだけど」

「ここら辺で強いつて噂の女の子は君の事か？」

俺の言葉に女の子は淡々と言ってくる。

「別に自分が強いと思ったことはないよ。周りの評価は知らないけどね」

「……いや、たぶんお前だろう。魔族のお嬢さん」

「ッ………！？ ……いや、私は半魔族^{ハーフ}だよ、お兄さん。それでどうしよつって言うんだい？」

女の子は獲物を構え、俺の一挙一動を逃さぬよう警戒するように目を光らす。

「……いや、どうしよつもしないわ」

「は？」

俺の言葉に女の子は、大きく口を開いて驚く。

「……英雄がそんなんでいいのかい？」

「なんだ気づいてたのか」

「気づかないこの街の皆が抜けてるのさ」

「かもな」

実際、俺が英雄だつてことに気づいた住人はいなかった。まあ辺境の街だししょうがないのかもしれない。

「まあお前を倒しても意味ないしな。強い奴と戦いとは思つが」

「なんだ、ただの戦闘狂か。警戒して損したよ」

戦闘狂じゃない、戦いが好きただけだ。

「結局お兄さんは何しに来たんだ？」

「強い奴がいるって噂を聞いたから、様子を見るに」

「……凄い行動力だね」

「暇だったからな」

だって講師の仕事おもしろくないし。

「まあ正体も知れたし、俺はもう行くところかな」

「へえ…お早いお帰りだね」

「ちょっと待ち人がいてな」

「お兄さんのこれかい？」

女の子は小指を立てながら聞いてくる。

「……………いや、ヤンデレさ」

うふふふふ、と目のハイライトが消えながらも俺は笑う。ちょっと女の子が引いてるが気にしない。

「……………じゃあ帰るよ」

「……………」

俺が一声かけても返事が返ってこない。女の子の方を見ると何故か唸っている。

「どうかしたのか？」

「……………よしー」

いきなり叫ぶとか、マジでどうした……………？

「私も着いて行こう」

「おい待て」

べし、と女の子にツッコミをする。

「いいじゃないか、こんな可愛らしい女の子がお供するんだぞ？」

「自分で言うな、自分で」

自分で可愛いとか言うとか、こいつテオドラマみたいだな。

「襲っちゃダメだぞ？」

「ロリに興味はない」

なんか軽いな、ノリが。

「まあ冗談は置いといて、行くところがないから着いて行くこと
思っ
て
ね。
可愛
い妹
が
で
きた
と
思
っ
て
く
れ
ば
い
い
よ、
お兄
さん」

「メンド臭そうな妹だな、おい」

「というか肌の色も違うから兄弟に見えねーよ。」

「……まあいい。ちょうど姉妹的存在もいるしな」

ブリジットとか、ブリジットとか、ブリジットとか。

「へえ…じゃあ、私がお姉さんだね」

「そこは次会った時に決めてくれ」

「わかったよ、お兄さん」

「……はあ」

「やっかいな妹ができてしまった。」

「そういえば名前を聞いてなかったな。俺の名はナガレ・オウミ。お前は？」

読んでいく。

「なになに……ナガレが帰ってくるじゃと!?! これは急いで準備せねば……」

想い人の急な帰還に、心が踊るアリカであった。新たに女の子が増えているとは知らずに……。

続く

第17話 帰還

一個目の用事が予想以上に早く終わってしまったので、予定よりも早くオスティアへと向かうことにした。

まずエルファンハフトの都市部に向かい、その港からオスティア行きの飛行船に乗ると、常に空中を浮遊しているオスティアへと向かった。飛行船の中は広く、壮大な景色を展望できる空間もあり、家族連れของกลุ่มが多く見える。部屋はスイートルームを予約していて、通常の部屋よりも豪華な作りになっている。

「あの遠くに見えるのがオスティアかい？」

「ああ。ちなみにあの真ん中の建物が現在の宮殿だ」

マナが望遠鏡を覗き込んでいる横で、認識障害のメガネを掛けた俺が答える。

「……見えるのか？」

「視力はいいほうだからな」

マナがそう聞くのも仕方がない。普通に見たらまだまだ見えないからな。

「私も視力はいいほうだけど、まだ豆粒ぐらいにしか見えないよ」

「まあ気にすんな。俺は部屋に戻るが、お前はどつする？」

マナは望遠鏡を覗き込みながらも答える。

「もう少し景色を楽しんでから戻るよ」

「そうか」

俺はオステイアまで一眠りするため、部屋へと戻っていった。

「……………いさん……………」

……………なんだよ、マナ。もう少し寝させてくれ。

「……………兄さん……………お兄さん……………」

「……………うーん……………あと、五十年……………」

近くでため息が聞こえる。

「……………五十年は寝すぎだよ。もう着いたから早く準備してくれ」

「……………わかった」

流石に冗談だから、そこまで呆れないでくれ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

...

「ここがオステイアか。結構栄えてるね」

飛行船から降りた俺は、マナと城下街を歩いている。

「戦後すぐに復興を始めたからな。今じゃ壊れてたところも元通りさ」

「あの戦争の中、よく持ちこたえたもんだよ」

「離宮があつたから良かったけど、なかつたらオステイアは滅んでたさ」

マジで離宮に感謝。元本城から25キロも離れてたおかげだよ。

「それでどこに行くんだ？」

「あれ」

俺は遠くにそびえ立つ城を指差す。マナは俺の指先の建物を見て少し目を見開く。

「……お城？」

「あそこの女王様に用事があるんだ」

「へえ……まあいいよ。細かいことは気にしない」

「それで結構」

細かいこと気にしてちゃ、人生楽しく生きれないからな。

「じゃ行くか」

「ああ」

俺はマナを横に従えりと、城に向かって歩き出した。

そして十数分かけて城門前まで来た俺達。以前は少し小さかった城門が大きくなっている。城門前には、商人や兵士などが行き来している。俺は空いている兵士を見つけると、その兵士に話しかけた。

「女王陛下に会いに来た。話を通してくれ」

「その前に、入城許可証をお見せください」

あれ？ 顔パスでいけると思ったのにな。不思議に思っていると、横にいるマナが小さな声で話し掛けてきた。

「…そのメガネの所為だと思うよ」

おっと、メガネ掛けてるの忘れてた。マナの言われたとおりメガネを外すと、目の前の兵士の表情が驚きに染まった。

「っ！？ ナガレ殿でしたか！！ ナガレ殿なら、構わず通せとアリカ様に言われておりますので、通ってくださいっても構いません！」

「そうか。じゃあ通らせてもらおう」

やっぱりメガネの所為でした。ナガレのうっかりさん

「気持ち悪いからやめて」

マナさん、わかってますとも。だから冷たい眼差しで見つめないでっ！

「アリアドネーの女子生徒のみならず、幼女まで手を出すとは何事じゃ！」

「ち、ちがうんだ、だいじょぶ？ お兄ちゃん」「ちよ、おま…」

火に油を注ぐんじゃねエ！！　つーか表情が楽しんでるのが、まるわかりだぞッ！！

ゾクッ！！

おおふう……凄い寒気とともに、後ろからなにやら殺気が……。まるで錆付いたロボットのよう後ろを振り返ると、そこには黒いオーラを纏った修羅が……。

「オラは怒ったぞ、ナガレ　！！！！！！」

「ちよ、それメタだから　」

アリカの金色の長髪が、まるでスーパーな野菜人の三段階目みた

いになつてるッ!?

「拳でド　　ッン!?!」

「!?!ぶおッ!?!」

超アリカ3は拳に大量の王家の魔力を込めると、右ストレートを俺の鳩尾に打ち込んだ。

「…………お前が、ナンバー…………ワンだ(ガクッ)」

…………へへ、燃え尽きたぜ。

あの有名なセリフを言ったところで、俺の意識は途絶えていった。

…………

…………

.....

.....

.....

.....

...

「なんじゃ、違うなら違うと言えばよかるうに」

「ムチャ言つなよ。あの場面で、どこにそんな余裕があった」

あそこまで連続で拳を叩き込まれちゃ、弁解のしようがありません。

「馬鹿だね、お兄さんは」

「お前に言われたくねーよッ!？」

火に油を注ぐ悪魔め！ …… 本当に半分だけ悪魔だけど。

「とうかが主は何をしに帰ってきたんじゃ？」

「いや？ 特に用事はないけど、あえて言うなら…」

「言うなら？」

アリカの瞳を見つめる。

「お前に会いに来た、じゃダメか？」

俺の言葉を聞いたアリカは時間が止まったように硬直する。

「な、な、な………」

「な？」

その次の瞬間、アリカの白い顔が真っ赤に染まる。

「ななななな、何を言っておるのじゃ、お主は！」

「なにつて…」

ただ会いにきたって言ったただけだけど…。

「じよ、冗談もほどほどにせぬと……」

「せぬと？」

そしてアリカは急にもじもじし始める。

「(ぼそ)本気になってしまうではないか……」

「え？」

いま急に耳鳴りがしてよく聞こえなかった。

「なんでもないのじゃ！」

「いたいたツ!？」

何故殴るし、アリカ。

「……まさかの鈍感か……先が思いやられるな」

「何のことだ？」

「いや……」

なんだよマナ、言いたいことあるなら言えばいいのに。

俺は頬に紅葉を作りながらも、もじもじしているアリカと何故か呆れかえっているマナを見続けた。

続
く

第18話 滞在期 前編

オスティアに帰ってきて大体二週間ほどたった。明日にはオスティアを出て、アリアドネーに戻るようになっていく。その前にこの二週間の間にあった事を話そうかと思う。

オステイア滞在生活1日目

俺が帰ってきた当日、俺が帰ってきたということで宴会が開かれ、酒を飲みながら楽しんでた俺のところにはアリカがやってきた。なんとアリカが、俺のために料理を作ったと言ってきたので、味見しようかと思ってたのに、出された皿の上には何故か“ダークマター”があった。

アリカが言うにはスクランブルエッグらしいのだが、これではハプニングエッグだ。正直、この食べたら死んでしまいそうな料理は、あまり食べたいとは思わない。しかし恥ずかしげにモジモジした感じに見つめてくるアリカがいるからには、ここは食べるという選択しかあるまい。そしてマナ、おめえニヤニヤしすぎだ。

ええい！ 食っちゃるわーい！！

唸れ、俺の胃袋ー！ と某ペガサスのな感じで心の中で叫びながら、それを一口放りこむ。

「いぶう！？」

「銃を買おうかと思っている」

銃か…その体で撃つた後の反動を抑えきれるのか？

「これでも半悪魔^{ハーフ}だからね。普通の少女とはちがうんだよ」

それもそうか。つーか心を読むな。

「心なんか読めなくても、顔を見ればわかるよ」

そこまで顔に出てるとは思わなんだが、まさか表情として出てしまっているのだろうか……。

「普段はあまり出てないと思うよ。いまは身体の調子が悪いんじゃないか？」

アリカの料理のせいですね、わかります。

「まあそれはいいから、早く行くぞ」

オスティアア滞在生活6日目

今日は昨日に引き続きマナと鍛錬した後、テラスでアリカとお茶を飲んだ。ちよつと前なら書類の捌く量が多すぎてお茶をする暇がなかったようだが、最近は城下も落ち着いてきて書類の量も減ってきたらしい。

「ふう……書類仕事は疲れる」

「あんまり無理すんなよ……お前が倒れたら、MMの害老どもが何をしでかすか……」

「わかっておる」

何がわかってんだか。こいつは何でも一人でしようとするから、誰かに見張らせないといつまでも無理するぞ。働き過ぎないように執事がメイドたちに見張らせるか。

「まあいいけどよ……それにしてもお茶が美味しい」

「主の場合はお茶ではなく、お菓子のほつじゃろ？」

オスティア滞在生活 8 日目

なんかやることもなかったもので、廃都となった旧オスティアへと向かうことにした。

旧オスティアの地上部には、落下した浮遊島が幾つも沈んでおり、普段は深い霧によってその正体を隠している。魔力消失現象が起きた現在では、特級危険区域として一般人はもちろん、力量の低い戦闘者でも立ち入り禁止となっている。まだ魔物などは住んでいないが、それも10年ほどすれば魔物の棲家と化していることであろう。ちなみに俺も魔力は持っているのですが、ここにはいると魔力が減っていった気分が重くなってくる。

「にしても運べば使えそうだな、ここの浮遊島」

いまは魔力がなくなって、地へと沈んだ浮遊島。魔力が戻れば再び浮かび上がるので、魔力のあるところに運べば浮かぶのである。といっても運ぶのに莫大な資金がかかるので、アリカはやっていない。でも小ささ目の浮遊島なら俺一人で持っていけるんだよね。分身すれば少し大きめでも持っていけるかもしれない。

「いまはやらないけど…」

結構疲れるし、スーパーな俺にならないといけないので今は却下ということ。まだ修行不足なのか、スーパーな野菜人になるの疲れるんだよね。

「そういえば墓守り人の宮殿でどこに落ちたんだったけ？」

確か元首都の奥のほうにあったはずだけど……あゝ、あれかな。なんか下の尖ったところが地面に刺さってるけど、多分あれだろう。アスナと脱出するとき空けた穴があるし。

「あの穴から入ろうかな」

だって入り口何処か知らないし。

俺は舞空術で穴の近くまで飛んでいく。

……しよ、……しよ

ん？ 誰かいるのかな？ ここは立ち入り禁止区域だから、上級戦闘者でもいるのだろうか。

…いしょ、…いしょ

いしょ？ 自殺するのか？ あれか、自殺するのに富士山麓の樹海までくると一緒の原理か？

よいしょ、よいしょ

あ、違うわ。なんかロープ着た人が穴を直してた。大変そうだね
……穴空けたの俺だけ。よし、とりあえず話し掛けよう。

「ふうー……疲れたから休憩じゃ」

「何してんの？」

ちょうど休憩っぽいので後ろから話し掛ける。

「ぬわあ！？ …… ななな、なんじゃお主！？」

「いや、そこまで驚かんでも」

ローブの人は驚いて、こちらにサッと振り返る。その時の反動でかشらないが、フードがはらりと頭から外れた。

「女の子だったのか？」

「男に見えるなら、貴君の目は腐っておるな」

「じゃあ腐ってないな、俺の目は。」

「で、なにやってんの？」

「見たらわかるじゃろ、壁の修復じゃ」

「そりゃわかるけど……」。

「じゃあ、なんで君みたいなのがやってんの」

「この管理人だからじゃ」

管理人て……そんなのいたのか……。

「貴君こそなぜこんな所に？」

「暇つぶし」

「……………」

女の子は半目で呆れてながらもこちらを見てくる。

「……………なんにもこんな所にこんでもよかるつに」

「いや、あんまり遠くまでこれないし……」

「そもそも貴君はどこからきたんじゃ」

今更疑問に思ったのか、女の子は聞いてきた。

「ああ……言っただけだったか。ここからちょっと行った所に、新オステイアがある。そこからだ」

女の子は俺がどこから来たか知ると、ピクツと眉毛を動かした。

「ほお……聞くが、いまの王の名はなんじゃ」

「アリカ女王陛下。フルネームは知ってるか？ フルネームは……」

「アリカ・アナルキア・エンテオフユシア」

言おうとしたら先に女の子が言った。

「なんだ、知ってたのか？」

「あつてるか確認しただけじゃよ」

そういってニヤリと笑う女の子。にしてもアリカのこと知ってたのか。つーかこの子の眉毛、アリカと似てんのな。結構珍しい形な

のに。

「そういえばお前なんて名前なんだ？」

「人に聞くときは、まずは自分からじゃろ？」

それもそうか。

「ナガレだ。ナガレ・オウミ」

「聞いても無駄じゃろうが、一応言っておこう。私の名前はだ」

「え？」

いま、なんて言ったんだ？

「くくく、貴君には聞こえんじやろ？」

結局名前のわからない女の子は、怪しく笑いながらも俺に聞いてくる。

「なんでなんだ？」

「それは秘密じゃ」

それじゃあどう呼べばいいんだ……。

「普段は“墓所の主”^{ほしよのあぬこ}と呼ばれておる。長いなら主^{ぬし}と呼んでくれ」

「じゃあ“ボア”で」

「……なぜボア？」

「“ぼ”しよの“あ”るじで、ボア」

「なんてアンチな……」

そう言つなよ、いい名前じゃん。

「まあ貴君が呼びやすい名前と呼ぶが良い」

「じゃあボアで決定。ボアは俺のことナガレって呼べよ」

「なに言ってるんじゃない、貴君は ……」

「ナガレ」

「貴君 ……」

「ナガレ」

「き」

「ナガレ」

「……………」

ボアは黙り込んでしまった。

「ナガレ」

もう一度、ボアに名前を言わせようと促してみる。

「……ナガレは結構頑固なのだな」

「そうか？ 初めて言われたな」

そこまで頑固ではないと思う。

「……まあよい。そろそろ穴を直すから、ナガレは帰れ」

「じゃあ次はどこから入ったらいいんだ？」

「……また来るのか……この建物の下の方に入り口がある。そこから正しい順序に進めば私の部屋に着くが、そこには通路が迷宮のようになる魔法がかかっておる」

ボアはローブの裾に手を突っ込むと、そこからあるものを取り出す。

「これを着けておけば迷宮の魔法はかかるまい」

ボアはイヤリングを俺に渡してきた。

「これは？」

「幻術系の魔法を無効化する効果を持ったイヤリングじゃ。ちやんと付けておかないと効果は出ないぞ」

「そうか、ありがとう」

「うむ」

「じゃあな」

俺はそれを耳につけると、穴を抜けてオスティアへと帰っていった。

「まったく、それにしても誰がこんな穴をあけたんじゃ……」

そんな声が後方から聞こえてきたが、流石に言えない俺であった。

続
く

第19話 滞在期 後編

オステイア滞在生活9日目

墓守り人の宮殿でボアと遭遇した翌日、俺は再び墓守り人の宮殿へとやってきていた。

「下の方に入り口があるって言ってたよなあ……」

さてさてどこにあるのかねえ……と、ここかな？

言われたとおりした方に来ると、ボアの言ったとおり入り口のような穴があった。飛空艇などが入れるようになっていたのか、結構大きめに作られている。奥のほうを見ると、宮殿のように大きな柱が何本も立ち並んでいた。

「よし、行くか」

俺は耳にイヤリングが着いているのを確認すると、舞空術をやめて、歩いていくことにした。

柱の立ち並ぶ通路を歩き続けると、通路はだんだん狭まっていつてすぐに突き当りへとなった。ふと、突き当たり正面の壁を見ると、壁には『ぼあのへや』と矢印と一緒に書いてあった。……あいつ結構やんちゃな性格してんのな…。

その後、至るところにある指示どおりに進んでいくと、祭壇らしきものがあつた。まあ魔力を感じるあたり、転送装置かなにかだろう。俺は祭壇の上へと上る。

「無事来れたようじゃな」

「ボアの標識のおかげだな」

目の前には、椅子に座つたボアがいた。でも身長が足りていないのか、足が床に着いていない。

「なんだ、その微笑ましいものを見る目は」

「いや、何でもないぞ？」

ただ足をぶらぶらさせるボアを見て和んだだけだ。
まあよい、とボアは肘掛に肘を立てかけ、顔を手で支えながら聞いてくる。

「それで、今日は何しに来たんじゃ」

「確か、ここにゲートってあったよな」

「あるにはあるが、それがどうかしたのか？」

「暇だから、俺を転移させてくれ」

ドンといった感じで、固まってしまったボア。

「……なんじゃそれは、別に良いが行き先は旧世界じゃぞ？」

「麻帆良だろ？」

「知っておったのか」

「アリカから聞いたことがある」

ボアはどうするか決めかねているのか、頭を悩ませている。

「まあ別に良からう。私が直々に転移させてやるから、感謝するんじゃない」

「ありがとうな、ボア」

麻帆良に行ってもやることないかもしれないけど、最近オスティアにいても暇だしな。

「それではゲートへと向かうぞ」

「わかった」

俺とボアは、ボアの転移魔法によってゲートへと転移した。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「そういえばボアはどうやって魔法を発動させてるんだ？」

ゲートの発動準備をしているボアに問い掛ける。普通魔力消滅現象の起きているところから一帯では、現在魔法は使えないはずだ。

「私の魔力は特殊だな。ここら一帯でも使える」

「そうなのか……」

特殊な魔力ってなんなんだろうな。

「ちなみにこの建物にも一部だけ、術式を刻んで魔法が使えるようにしとる。通路にある迷宮の魔法とかな……よし、準備ができた。そこに入れ」

「了解」

ボアが指定した位置へと俺は入る。周りには石が立っていて、まるでストーンヘンジみたいだ。

「それでは転移術式を発動する。ちなみにここは今回の転移で魔力がなくなるから、約20年ほどたたないと再び転移することはできない」

「ちょ……マジで……!?!」

転移する直前、ボアが衝撃的なことを言った。

「なに……イギリスなどにもゲートはある。心配はするな」

「いつ帰れるかわか ……」

全て言い終わる前に、俺は麻帆良へと転移された。

「運がよければ、数日で帰って来れるじゃろ」

一人残されたボアは、転移で自室へと戻っていった。

「どぶあー!?」

どずん、という音とともに、俺はケツから地面に落ちる。……な

んか久しぶりにケツから落ちたよ。

転移の際に使った魔力は既に萎んで消えていった。転移した先は麻帆良のはずだが、ここは地下なのか、周りには木の根っこが絡まった柱などが見られる。

「おやおや。……これはまたお久しぶりですね、ナガレ」

「……お前かよ、アル」

誰かが転移してきたかと思えば、常にしている微笑が怪しいアル
ビレオ・イマだった。

「それより何故ナガレがここにいるんですか？」

「これだよ」

俺は現在立っているところを指差す。

「ゲートですか……（ぼそ）確か封印したはずなんですけど……」

「はあ？　なんて？」

一瞬アルの顔が真剣な表情になって何かいったんだが、よく聞こえなかった。

「いえ、何でもありませんよ」

「そうか…」

なんか隠してそうだが、無理に聞いてもしょうがない。

「ここで話すのもなんでしょうから、私の秘密基地へところ招待しましよ」

「秘密基地ってなんだよ…」

「こいつちょっと子供っぽいつーか、なんかズレてるよな。」

「ささ、行きましょ」

アルは踵を返すと、着いて来いと言わんばかりにどンドン歩いていく。

「はあ……行くか」

俺はいつまでもここに居る訳にはいかんのだが、とりあえずついでに行く事にした。

……

……

……

……

……

……

……

「とつとつぞ」

俺は渡されたお茶を受け取ると、乾いた口内を潤すため、一口だけお茶を流し込む。

「ふう……それにしてもアルは何でこんな所にいるんだ？」

充分に口を潤した俺は、ずっと疑問に思っていたことを聞いてみる。

「先の戦いで少々疲れましてね。いまは休憩中ということですよ」

「ふうん……そういうことね」

全然疲れたようには見えないけど、まあ何かしら理由があるんだろつね。

「そういうナガレは何をしてるんですか？」

「今は紛争を止めながらも、アリアドネーで講師をしたり、後は

アリカの補助だな」

「ふふふ、それは随分忙しそうですね。ナギも紛争を止めようと世界を回っているようですが…」

「知ってるよ、この前“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”の認定されてたし」

俺は魔法使いじゃねーからされねーけどな。つーかMMの野郎どもに賞賛なんかされても嬉しくねーし。

「そうですか。まあ魔法世界にいるなら、ナギの噂なら嫌でも聞くことになるでしょうし、知っていても不思議ではないですね」

「そりゃな、あいつも頑張ってるらしいぜ。魔法学校中退に癖にな」

「世界中の魔法使いに、ナギが中退だっということを教えればどうなるでしょうね？」

「きつと発狂するに違いねーな」

まあ嘘だと思われるのが、殆どだと思っけど。

「さて、ナガレはどうするのですか？」

「帰るよ、今から」

「この学園長に挨拶はしないのですか？」

「してどうすんだよ。意味ねーし、メンドくさい」

宇宙人な老人には、のちのち会おうとしよう。

「やれやれ…では地上までお送りしましょう」

「すまん」

俺はアル先導のもと、地上へと向かっていった。

「イギリスわかるか？」

こくこく

「じゃあ頼むわ」

ビシッ！

いや、人間味ありすぎるぞ、この雲。ま、いつか。細かいことは気にしない。

「イギリスへ、レッツ・ゴー！」

びゅづうう

んっ！

その後、雲の上でまったりと寝た俺は、6時間掛けてイギリスへと向かった。筋斗雲マジぱねえ。

早速第一村人発見！ ……ここ村じゃなくて、街だけど。

「ああ、こんにちわ。実はメルディアナ魔法学校に用事があった
ね」

「なんじゃ、あんたはこちら側の人間か」

爺さんは俺が一般人だということ前提で話してたわけだ。まあ魔法は秘匿されてるし、ここに観光しに来る人もいるんだろうな。

「まあね。それでどこにあるか教えてくれるか？」

「あの一番目立つ建物じゃよ」

爺さんは高い塔のある建物を指差す。

「すまないな爺さん」

「いいんじゃないよ、若い者を導く事が年寄りの仕事じゃからな」

物理的に導くことではないと思うけど…。

「爺さん名前は？」

「スタンじゃ。この街の近くにある小さな山間の村に住んでおる」

小さな山間の村か…そこがナギの故郷だな。だってこの爺さんスタンていう名前だし。

「スタン爺さんが。覚えておこつ。俺の名は …」

うん、言った方がいいのかな。まあこの人なら大丈夫かな。

「ナガレだ。ナガレ・オウミ。いまは英雄やってる」

俺はメガネを外しながら、スタン爺さんに言った。

「！？ まさか英雄とはな。まあナギもいまじゃ英雄だし、そこまで騒ぐことでもないかの」

スタン爺さんは少し驚いたぐらいで、あまり騒ぐことはなかった。

まあナギという英雄が近くに住んでいたわけだしな。

「ちよつと野暮用でね。ここの校長に頼みたいことがあるんだ」

「それならワシが伝えてやるつ。校長とは親友じゃからな」

そうだったのか、ラッキーだったな俺。

「それなら頼む」

「それでは行くとするか」

スタン爺さんは踵を返すと、メルディアナ魔法学校へと向かっていく。俺も置いていかれないようについていった。

.....

.....

.....

.....

.....

「これはこれは英雄殿、こんな田舎の魔法学校になんの用かな？」

スタン爺さんに話を通してもらい、無事校長へと会えることになった俺は、現在校長室にいた。スタン爺さんは村に帰るといって、既に別れている。そして目の前にはガンゴ爺さんがいる。

「いやなに、少し頼みたいことがあってね。ゲートへと向かいたいんだ」

「それはちょうどいい時期に来たようじゃな。ちょうど明後日にゲートが開くことになっておる」

「おお、ラッキーじゃねーか！」

なんとという偶然。これに間に合ってなかったら来月になってたか
もしれない。

「ワシはここから離れられんからの、彼女に頼むとするか……お
ーい、入ってくれるか！」

「は、はい！」

校長が誰かを呼ぶと、扉が開いて一人の女性が入ってくる。金髪
の似合う女性で、スーツを着ているがまだ若いので、スーツに着ら
れている感じだ。なぜか頬が赤い。

「彼女はワシの助手でドネット・マクギネス。彼女に案内を頼も
うと思っ」

「ドネット・マクギネスです！ よ、よろしくお願いします！」

「ああ、よろしく」

そしてゲートの開く日の朝、俺は自前のローブを着ると、朝霧の濃い中を歩いていく。これは人口の霧ではなく魔法で作られた霧で、ゲートへと向かう時に一般人に見られないようにするためのものだ。

「またせたな、ドネット」

「いいえ、私もいま来たところです」

ドネットもローブを着ている。ゲートを使うときの決まりらしい。

「では行きましょう、ナガレ様」

ちなみにドネットも俺のファンの会員だった。

歩くこと約10分、霧があげるとそこには石の立ち並ぶゲートの姿が見えた。俺達のほかにも何十人もの人たちが既にサークルの中に立ち並んでいる。

「あと30分もすればゲートが開きます。それまで朝ご飯にしましょ」

「そうだな」

朝ご飯はなんとドネットが作ってきてくれたらしい。

「ナガレ様は大食漢といわれたので、大量に持ってきました」

ドネットはどこから出したのかは知らないが、大量の料理をどんどん出していく。

「朝から作ったのか？」

ドネットは少し頬を赤く染めながらも答える。

「えーと、実は昨日の夜から作り始めました」

なんと健気な女の子なんだろう。いま俺の胸にキュンときてしまった。

「……可愛いな、ドネットは」

「ななな、何をおっしゃるんですか!? 可愛いんだなんて……」

俺の言葉に驚いたドネットの顔は、恥ずかしいのか徐々に赤くなっていく。

「……へう」

ばかり、とドネットは最終的に倒れてしまった。頭から煙が出るから、恥ずかしさで気絶したのかな？

「がっがっがっ ……」

とりあえず言いたい事は料理が美味い。ドネットにお礼を言いたいけど気絶中だ。後で起こしてあげよう。お礼はそのときだ。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「すみません、気絶してしまっ……」

「こっちこそすまないな。料理も一人で食べちゃったし」

そろそろ時間がきていたので、ドネットを起こしてあげた。起きた瞬間、謝られたが。

「いえ、私は軽く済ませてあるので大丈夫です。それより料理ど

うでしたか？」

「もちろんおいしかったさ。また食べたいくらいだ」

「ふふ、いずれまたご馳走いたします」

「それは楽しみだ」

俺とドネットがほのぼの話していると、カランカランという音と共に魔力が高まるのを感じた。

「そろそろゲートが開く時間です」

ドネットの言葉を聞いた次の瞬間に、地面が光り輝く。

「来るぞ」

ウォン…ゴゴオオオ…

その後、無事魔法世界へと戻ってこれた俺。送ってくれたドネットは魔法世界で一仕事あるらしい。

「あの…ナガレ様」

「なんだ？」

ドネットはモジモジして、上目遣いでこちらを見てくる。…ドネット、萌え〜。

「一つ、頼みたいことがあるんです…けど…」

「なんだ？」

少し悩んだようだが、ドネットは決心したような顔で言ってきた。

「あの…サインくださいー!!」

「いいけど…それだけ？」

「はい！」

もじもじしてた割に、要求は結構軽いもんだな。ファンだったらこんなもんなのかな？

渡された色紙にさらさらっとサインを書くと、ドネットへと渡す。

「はい、どうぞ」

「家宝にしますね！」

「いや、そこまでせんでも……」

価値はあるかもしれないけど、家宝にはせんでもいいよ。

「じゃあちよっと急ぐから、俺はそろそろ行くわ」

アリカとマナを待たせてるし。

「はい、またメルディアナへとお越しください」

「ああ、じゃあな」

お元気でー、という声を背中に受け、俺はオスティアへと全力で飛んでいった。たぶん帰ったら殴られるだろうなー……アリカに。

……

……

……

……

……

……

……

「た、ただいまー……」

夕方になってやっと帰ってこれた俺は、さっそくアリの自室へと来ていた。部屋を覗き込むと、ベットに座り背中をこちらへと向けるアリが見える。夕日であまりよく見えない。

「アリカさん……ナガレですよー……」

返事をしてくれないとか、ヤバイぞこれは……。

「……す、……ろす、……す、ころす、……ロス、コロス、……ス」

なんか殺すとか聞こえるんですけど。これは逃げるしかない。俺はドアを閉め、部屋の前から走り去る。

ギィ……カッソ……カッソ……カッソ……タッタッタッタ……

ヤバイヤバイヤバイ……！！！！ ドアの開いた音がした後は歩いてたのに、今は凄い速さで走ってきてるんですけどッ！？

「ナ〜ガ〜レ〜」

なんか俺を呼ぶ声が聞こえる　　ッ！？　　うお、剣が飛んできた！？　マジでやられる！！

スピードアップするが全然引き離せない。ずっと走って走って一生懸命逃げるが数十分後、遂には行き止まりに追い込まれてしまった。

ガシッ

頭を掴まれ、強制的に頭を後ろに向けさせられる。そこには何とも楽しそうな顔をしたアリカがいた。

「つゝかまゝえた」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「いや ツー!!! 俺を汚さないで ツー!!!」

もうすこしでアメリカに（性的に）襲われるところだったんだけど、気が付けば自室のベットの上でした。窓をみれば太陽の光が差し込んでる。身体は悪夢でも見たときのように汗だく。なんか顔が痛い。

「……………あ、夢か」

昨日そういえば帰ってきた後、心配したアリカに顔をグーで殴られてそのまま気絶したよな。じゃあこれは夢でしょう、夢に違いない、というか夢にしてください。

「ようやく起きたようじゃな」

「ひいッ!？ すいませんすいませんすいません」

「いや、失礼な奴じゃな!？」

俺の態度に驚くアリカ。あの悪夢を見れば皆、アリカを恐れるはず。

「面倒じゃからおいとくが、結局どこに行っておったのだ。心配したのだぞ?」

「……………いや、実はカクカクシカジカで……………」

「ふむ……………そんなことがあったのか」

……思っただけど、王族ってこんなのでわかるもんなのか？ テ
オドラもだけど…。

「ま、事前に軽く知らせといたただけね！」

「なに言っておるんじゃ、主は」

ちなみに手紙ではなく、念話でやりました。まあ俗に言うネタ合
わせですね。

「ま、色んな所にいけて楽しかったよ」

「私は仕事に明け暮れておったんじゃがな…」

いやだな〜アリカさん、そこまで怒らないでくださいよ。

「バツとして、これからアリアドネーに帰るまでの時間は、ずっと
と一緒にいてもらっぞ」

モジモジと赤くした顔でいうアリカ、萌え〜。

「ちなみに仕事も手伝ってもらおう」

そこからさらっと真顔で言うアリカは、残酷で鬼畜でした。

「自業自得さ、お兄さん」

いつも一言多いぞ、マナ。

続く

第20話 幼女、現る

「ああ…ナガレしゃま、お別れなんて悲しいですわ」

「ほら、涙を拭いてよネム。凄い顔になってるよ…」

オスティアから帰ってきた俺はその後、講師生活を半年ほど続けた。そしてアリアドネーの講師を終えた俺。現在はオスティアへと向かう飛行船の乗り場前にて、生徒達のお見送りを受けている。

「大分懐かれたようだね、お兄さん」

「流石です、ナガレ様」

今は大人しくしているが、マナとブリジットも最初に会ったころは、結構睨みあっていた。マナとオスティアから帰ってきた時なん

か、それを見たブリジット
が凄く驚いていた。そこから長い間言い争って落ち着いたと思っ
たら、結局なにか話し合った後に結束していた。仲が悪いのか良いの
か良くわからない。

「達者でな、セラス」

「ええ、ナガレ殿もお元気で」

教師として活躍しているセラスに別れを告げる。

「短い間だったか世話になった。カナリアも達者でな」

「こちらこそありがとうございます。……食費は随分とかかっ
たようですが」

それは知らんな。俺がたくさん食べることを知らないカナリアが
悪い。

「それじゃあそろそろ行こう」

アリアドネーからオステイアへと帰ってきた俺達は、早速アリカの執務室へとやってきていた。

「なんじゃ、また旅立つというのか？」

「半年ほどはオステイアにいたいと思う。それはいいとして ……」

俺は後ろに控えるブリジットを前にだす。

「 ……こいつが前から言っていたブリジットだ」

「よ、よろしくお願いします」

アリカは少しムツとするが、すぐにブリジットへ話し掛ける。

「 ……この女子おながナガレのいつていたものか」

「ああ、いまは俺の従者的なことをしている」

何故かアリカの雰囲気きふいが険悪なものとなる。

「……仮契約はしとらんじゃろつな」

「してないさ」

だから落ち着いてください、アリカ様。

「まあよい。それより休養中は何をするんじゃ？」

「鍛錬とか休んだりしかならないと思うけど……」

暇だったらボアのところに行っても良いかもな。

「いま他の女を想像したじゃろ」

「……してない」

やっぱりアリカ、鋭すぎるぞ……。やっぱり女ってこえエ……。……。

「……仕事が忙しいから、これで終わりにするとしめし」

「いってらっしゃい、お兄さん」

「いってらっしゃいませ、ナガレ様」

三種三様に送り出してくれたアリカ達の声を聞いた俺は、オステイアを出て旅立っていった。

今回は紛争地域も回るが、他にも色んなところを歩いていこうと思う。どこに難民がいるかわからないし、困ってる奴がいるかもしれないーしな。

オステイアからでた俺はエルファンハフト、アンティゴネーと進むと海を渡り、アル・ジャミーラ、桃源から海沿いに進んで廬遮那、そこからまた海を渡りケフィツススへとやってきていた。

アル・ジアミーラは南米系、桃源と廬遮那は想像どおり中国系だった。ケフィツススには都市みたいところはなく、所々に集落があるだけで結構田舎っぽいところである。

ケフィツススはエリジウム大陸にあり殆どが自然ばかりで、2500キロほど南に進むとケルベラス大樹林があつて古代の遺跡が多く残っているらしい。近くにはグラニクスがあるので、暇があつたら拳闘大会でも見に行こうかと思う。

「 ということなんで、着いてくんな」

「 やだ。お前がうんと言つまで、たとえ逃げても地の果てまで追

ってやるぞ」

幼女エ……。

「着いてきたらエヴァたんって言つぞ」

「好きにしる」

エヴァたんエ……とふざけている場合ではない。崖から落ちそうになっていた所を助けてあげた幼女、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。助けた後、時間も遅かったので一緒にご飯を食べた。りしたが、次の日も俺が旅を続けようとしたら何故か着いてきた。

「もう一ヶ月だぜ？ そろそろいいだろ……」

「知らん」

……どうしてやるうか、この幼女。うーん、もうナギに任せようかな。あいつだったら何かしら呪いでも掛けてくれるだろ。原作どおりなら登校地獄だけだ。

「ちよっと待っとけ」

「? …わかった」

ということでもナギに連絡するか。

『ナギ』

『!?!? …ナガレか、どうしたんだ?』

『いや、すこし頼みたいことがあつてな』

『ナガレが頼みごとなんて珍しいな』

『俺だって困りごとはあるさ』

『それでどこに行ったらいいんだ?』

『ああ、それはな ……』

ナギに居場所を伝えた後、俺は念話を止めた。

「…これでよし」

後はあの幼女をナギに指定した場所に誘導するだけか……。

「おい幼女」

「なんだ」

「俺は今から大事な用がある。だから今から言うところに行つて待つとけ」

「私も着いていく」

エヴァンジェリンは強情にも頷かない。

「ダメだ。俺が行つた場所に行くなら、これからも着いて来る事を許そう」

「それならいいぞ」

「ほほお…随分と色んなところを旅しているようじゃな…!!?
なに」

ある一文に驚いたアリカ。

「金髪の少女じゃと!? ……ぐぬぬ…また誑しこんでない
じやろうな……」

新たな邪魔者に心が乱れるアリカは、手にする手紙を握り潰した。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795t/>

超野菜人、魔法世界に参る

2011年12月24日01時52分発行